



一人ではどうにもできない貧困、
だから一緒にかえていく。

We walk together for the world without poverty.



アクセス
年次報告書
2012

アクセスとは

アクセスは、フィリピンと日本で

貧困問題の解決に向けて活動する国際協力 NGO です。

フィリピンの貧しい人々も、日本で暮らす人々も、ともに地球市民として

「貧困をはじめとする社会的な課題を、一人ひとりが主体となって解決し、

より良い社会を創っていく」ことをめざしています。

Aspiring Citizens for Community Empowerment with Sunny Smile

Contents

私たちのめざすもの……………	3	2012 年度決算報告 ……………	26
 5分で知る、2012 年度のアクセス		 アクセスについて	
事業概要/組織図……………	4	私たちの活動の柱……………	29
2012 年度 活動ハイライト……………	5	エンパワメントと組織化……………	30
 2012 年度事業報告と 2013 年度事業計画		会員・寄付者／ご支援いただいた団体・企業／	
1. アクセス総評……………	8	加盟団体・ネットワーク ……………	32
2. フィリピン事業報告 ……………	10	役員・スタッフ・ボランティアスタッフ……………	33
3. 日本事業報告……………	14	アクセスのあゆみ 1988-2013 ……………	34
4. 2013 年度、ご参加、ご協力いただきたい活動……………	23		
5. 2013 年度計画……………	24		

年次報告書に込めた想い

アクセスの活動にご参加・ご協力をいただいている皆さまに、これまでの活動の成果をご報告すると同時に、これからの活動の展望や計画を具体的にお伝えすることを目的に、本報告書を作成いたしました。お読みいただく全ての皆さまに、アクセスの活動の成果や課題をご理解いただければと願っています。

「私たちのめざすもの(P3)」、「私たちの活動の柱(P29)」、「エンパワメントと組織化(P30)」では、アクセスが何をめざして活動をすすめていこうとしているのかということを明らかにしようと試みました。活動の背景にある私たちの想いや考えについても、お読みいただければ幸いです。

「私とアクセス」

本報告書の表紙に使われている写真は、「私とアクセス」という企画で撮影された写真です。
「あなたがアクセスと関わり続けている理由は？」と問いかけ、その答えを書いていただきました。

私たちのめざすもの 「誰もが希望を持って生きられるように」



■痛みを和らげながら、原因にも目を向ける

アクセスのミッション（使命）は、3つです。

1つ目は、貧しい人々が今まさに直面している貧困の痛みを和らげようとする活動（教育、保健衛生、生計面などの支援）です。2つめは、貧困の原因を明らかにしながら、貧困をなくそうとする人々を増やすことです。3つめは、それら2つを実践し、よりよい社会を創っていく力を、日本人・フィリピン人ともに身につけてもらうために、協力できる場を提供することです。どれか1つだけでは、貧困をなくすことはできないと考えています。

■国境を越えて思いやりあう関係を築く

アクセスの奨学金プログラムは、年間15000円で一人の子どもを小学校に通えるようにする、教育里親制度です。奨学金を受給したとしても、その家族がすぐに貧困から抜け出せるわけではありません。しかし、食事さえ満足に準備できないような時であっても、「日本で応援してくれている人がいるんだから、何とかがんばらないと」と感じる人は多く、支援者の存在が心の支えとなっています。他方、日本の奨学金サポーターの中には、「フィリピンの子どもたちから届く手紙が励みになり、辛い仕事もがんばれます。」とおっしゃる方もいます。単なる経済援助ではなく、「国境を越えて思いやりあう関係を築くこと」ができればと思いながら、プログラムを実施しています。

貧困の中で生きるとは、次々と問題が押し寄せる毎日を生き延びるということです。私たちNGOにそれら全ての問題を解決することはできませんし、問題を解決していくのは問題の中で生きる人々自身です。そんな中、「希望を持ち、前を向いて生きていこう」と思えるよう支援するのが私たちNGOの役割だと考えます。

■ペレーズの漁獲量減少と日本

アクセスの事業地の1つペレーズ地区の漁師は言います。「20年前は数時間で何キロもの魚がとれた。でも今は、8時間漁を続けてもせいぜい2〜3キロだ。」ペレーズ近辺の漁獲量減少の最大の原因は、日本、中国、台湾、韓国などから来る大型漁船による乱獲と言われています。実は私たちは、知らず知らずのうちにフィリピン近海でとれた魚を、日本で口にしているのです。

「より便利で、より安く、より質の高い暮らし」を求める日本のライフスタイルは、見えないところで、ほかの国の人々の生活に影響を与えています。こうした日本のライフスタイルを見直し、どうすれば「誰もが幸せに暮らせる世界を創れるのか」を考える必要があるのではないのでしょうか。

■誰もが希望を持って生きられるように

東日本大震災と原発事故以降、多くの日本人が「便利で、安く、質の高い暮らしよりも大切なもの」について考えるようになっていきます。原始時代のような暮らしに後戻りするのではなく、しかし便利さや物質的な豊かさばかりを追い求めるのでもない。個人の多様な価値観を尊重しながらも困った時は助け合えるような、新しい形の「豊かな社会」を模索する人が増えています。だからこそ、貧困に苦しむフィリピンの人々を支援し、そうした人々から届く手紙に励まされ、少しでも自分が他の人の役に立っていることで勇気づけられたりするのではないのでしょうか。

アクセスは、経済的な貧しさを克服しながら、新しい形の「豊かな社会」を築こうとする人々が出会い、協力できるような場でありたいと考えています。そうした協力が国境を越えて広がり、希望を持って生きられる人が一人でも増えるように、皆さまとともに活動を創っていききたいと思います。

フィリピン事業概要



■ピナツボ

1991年に起こったピナツボ火山噴火の被災地区。特に土石流堆積の被害が大きかったパンパンガ州ポーラック町ミトラで、教育支援事業と、農業を中心としたコミュニティ復興事業を進めています。



■ペレーズ

小さな島の一画にある、貧しい農漁村地区、ペレーズ。農業と漁業で生計を立てる人々が大半を占めています。ここでは1999年より、教育支援、フェアトレード、青年育成、マイクロファイナンスなどの支援活動を行っています。



■アペロクルス

マニラ首都圏内にある川沿いのスラムの1つであるアペロクルスでは、1997年より、教育支援、青年育成などの支援活動を行っています。



■スモーキーマウンテン

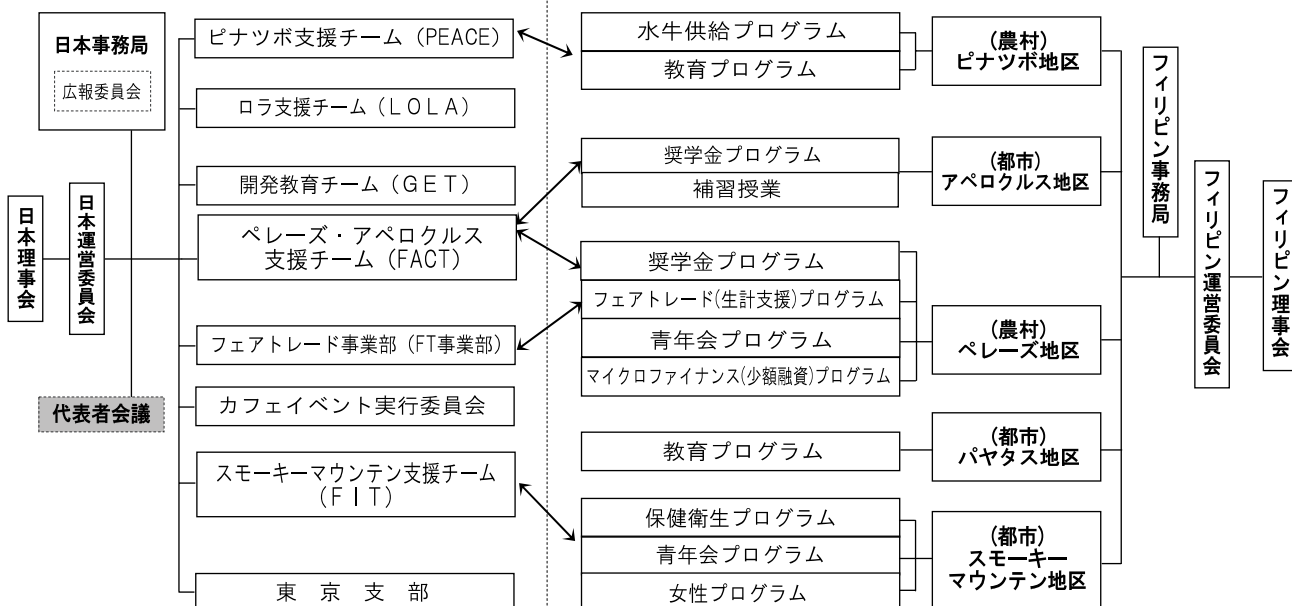
マニラ首都圏から出るゴミの集積場であるスモーキーマウンテンには、ゴミ拾いで生計を立てる貧しい人々が約6500人暮らしています。ここでは、2005年より、保健衛生、青年育成、女性支援の活動を行っています。



組織図

アクセス・日本

アクセス・フィリピン



*アクセス・日本とアクセス・フィリピンは、それぞれの国に理事会をもち、それぞれ法人格を持っていますが、実質的には2つで1つの国際協力NGOです。2009年度からは国際理事会を設置し、単一のNGOとして意思決定を行っています。

2012年度活動ハイライト

アクセスは2012年度、 168人の子どもたちの 就学を支援しました

- 奨学金プログラム 77名
ペレーズ / アベロクルス（前年度比+16）
- 小学校運営支援 61名
ピナツボ火山噴火被災地（前年度比+23）
- 就学前教育施設支援 30名
ピナツボ火山噴火被災地（前年度比+8）



フィリピンにはまだまだ、経済的な理由で教育を受けられない子どもたちが少なくありません。フィリピン教育省によると、2010年度は6～11歳の子どものうち、約10%が就学できていないといいます。小学校に入学した子どもたちのうち約30%は、卒業までに経済的な理由などで中途退学してしまいます。基礎教育は、読み書き計算といった、生きていく上で最低限必要なスキルを身に付けるというだけではなく、子どもが自尊心を持つ上でも重要です。子どもたちは教育を通じて視野を広げ、集団行動の中で多くを学び、クラスメートと一緒に課題を解決しながら成長していきます。

アクセスでは、事業地の中でも特に貧しい家庭の子どもたちを対象とした奨学金プログラムを実施して、公立学校への就学をサポートしたり、教育施設そのものがなかった被災地の村に学校を建設してその運営を支援したりしています。

「子どもたちみんなが学べるコミュニティ」、夢の実現まであと一歩

1991年のピナツボ火山の大噴火から16年ものあいだ教育施設が一切なかったミトラ地区。最寄りの小学校までの交通費は往復 150 ペソ(約 345 円)と、1日の収入の半分を超えるため、ほとんどの子どもたちが学校に通っていませんでした。そんな現状を見たアクセスの長年の支援者のお二人が、多くの方に支援を呼びかけてくれ、2008年に校舎建設が実現しました。

その後、数年間はミトラ小学校には先生は一人しかおらず、3学年一緒に複式学級でした。保護者は先生の増員を希望し、教育省にかけあいましたが、返答は「生徒が 40 人を越えない限り、2 人目の先生の派遣はできない」というものでした。

そこで、しばらくの間だけ近畿ろうきんからの支援金を活用して先生を増員することにしました。おかげで2012年度に4年生が開校され、結果的に生徒数が増え(全校で61人)、教育省は3人目の先生の派遣を決定しました。このことがはずみとなり、2013年6月の新学期からは4人目の先生の派遣も決定。ミトラ小学校は、5年生まで受け入れられる学校となりました。

日本からの支援に触発され、子どもたちの保護者、地域の

人々、行政の姿勢が変わってきており、そうした大人たちの努力の結果として、地域の教育環境が改善しています。「6年生まで地元で学べる」という地域の人々の夢の実現まで、あと一歩です。子どもの人権侵害や虐待などのない、「子どもにやさしい地域づくり」という次の目標も視野にいれながら、アクセスは地域の人々とともに進んでいきます。（詳細はP12、P21をご覧ください）



小学校を背に、ポーズを決める子どもたち。校庭には、子どもたち、保護者、先生が協力して植えた木や野菜が育っています。

2013年度は、264名の就学を支援します！

2012 年度 活動ハイライト

「自分たちの生活は、自分たちの手で守る」という遺志を継いで



マニラ市トンド地区スモーキーマウンテンは、ゴミ捨て場の周辺にあるスラムで、現在約 6500 人が暮らしています。この地区のリーダー的存在で、アクセスの運営する多目的保健センターでヘルスワーカーとして働いたこともある女性、マルー・ヴァリエさん（左写真）が、2012 年 7 月 22 日にギャングによって射殺されました。

2012 年、コミュニティは再開発の対象となったことにより、立ち退きを迫られるようになりました。立ち退きが行われれば、住民は住む場所と仕事を同時に失います。マルーさんを中心とした住民組織 SSDN のメンバーは、自分たちの生活を守ろうと、立ち退き反対運動に力を入れるようになりました。そんな中、ギャンググループのメンバーが銃を持って彼女の家を訪れ、銃を突きつけて「反対運動を止めなければ、家族全員を殺す」と脅したのです。実際にマルーさんが殺されたのは、その脅しが行われた4ヶ月後のことでした。マ

ルーさんは、「地域住民の健康と安全は、自分たちの手で守る」という強い信念のもとで生きる、強い女性でした。アクセスは悲報を受けた直後から、住民を支持する署名キャンペーンを本格化させました。

立ち退き反対署名キャンペーン、賛同者11,083人に

スモーキーマウンテンの住民組織 SSDN は、再開発に伴う立ち退きに反対し、ゴミ捨て場周辺地域で居住し続けることを求める声明を発表しました。アクセスでは、住民の要求を支持する「署名キャンペーン」を 2012 年 7 月より開始。会員や支援者の皆さまをはじめ多数の個人・企業・労働組合にご協力いただき、10,000 筆以上の署名を集め、フィリピン政府に提出しました。

2013 年 7 月までに、フィリピン政府は一部の住民に対して再定住地を提供しており、約 200 世帯が自発的な立ち退きに同意し、移住しました。しかし大部分の住民はまだスモーキーマウンテンに残り、先の見通せない不安な生活を続けています。今後もアクセスは、住民の想いに寄り添い、人々が要求をまとめ、政府と交渉していく上でのサポートを継続していきます。（詳細は P11、P19 をご覧ください。）

マイクロファイナンスに65人が参加、返済率100%

ペレーズで 2011 年から始めたマイクロファイナンス事業。貧しい家庭の主婦を対象に、雑貨店経営、養豚、軽食の路上販売、炭作りなどの小規模事業を行うための資金を低利子で貸し付ける融資プログラムです。事業を通じて女性たちは「自分にも家族を養う力がある」と気付き、自信と自尊心を得ています。メンバーの共通した願いは、三度の食事ができ、健康でいられ、子どもたちがよりよい生活ができることです。マイクロファイナンス事業は、そうした願いを、女性たち自身が自らの力で叶えられるよう、チャンスを提供しています。



Livelihood

貧困の中で生きる人々と出会い、向き合う旅 4回のスタディツアーに、合計64人が参加

貧困の現実を目の当たりにし、その中で苦しみもがき、努力し、生き抜いている人々と会うスタディツアーを、アクセスは長年続けています。2012 年度に参加された方々も、フィリピンの都市スラムや農漁村地区の厳しい生活に驚くと同時に、そこで出会った人々の笑顔や優し



さ、最大限のおもてなしに、心があたたかくなっただけです。アクセスはツアーを通じ、そうした貧困の現状を見てもらうことはもちろん、その貧困の原因とは何なのかについて考え、議論する場を提供しました。そして、貧困をなくすために、私たち一人ひとりに何ができるのかを問い、語り合いました。こうして多くの方に、貧困は他人事ではなく「私たちの問題」であると感じてもらうことができ、「もっといい社会を創りたい！」と決意する人を増やすことができたと感じています。（左写真：ツアー中のディスカッションの様子）

10,238枚達成！ 書き損じハガキ収集キャンペーン



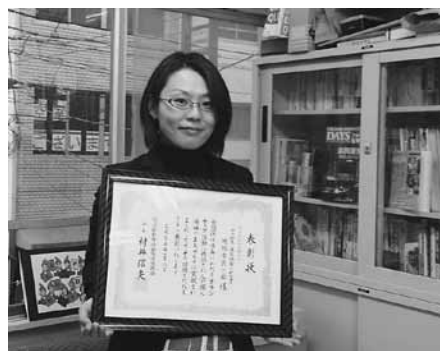
2011 年度後半から行っている書き損じハガキキャンペーン。2012 年度は年間目標 1 万枚を掲げて、29 の団体・グループ・学校に協力をお願いしました。結果、幼児教室、大学のゼミ、学習塾、高校生徒会、寺院など、9 ヲ所にてハガキ収集に取り組んでいただくことができ、合計 10,238 枚（約 39 万円相当）を集めることができました。

いただいたハガキは業者を通じて換金し、ペレーズの子どもたちへの奨学金のほか、フィリピンの子どもたちや女性をエンパワメントする活動に役立てさせていただきます。（詳細は P9、P14 をご覧ください。）

（左写真）会員の窪田静太郎さんの紹介で、七田チャイルドアカデミー（城陽教室、伏見教室、桃山教室）にハガキ収集ボックスを設置していただいています。

社会福祉事業奉仕活動賞をいただきました

2013 年 1 月 8 日、京都市社会福祉協議会より、「ボランティア活動に精励し、人が輝く福祉のまちづくりに貢献した」として、社会福祉事業奉仕活動賞をいただきました。会員・支援者の皆さまとともに歩んできたアクセスの 24 年間の活動が認められました。これからも、応援してくださる方の声に耳を傾けながら、もっと多くの人々とともに、よりよい活動を創りだしていきたいと願っています。



2012年度事業報告と2013年度事業計画

アクセス総評

3ヵ年計画の最終年度の成果と課題

アクセスでは日本・フィリピン(以下、「日比」)ともに2010～2012年度の事業方針や事業目標、財務目標を定めた3ヵ年計画を策定し、その実現に向けて取り組んできました。3ヵ年計画の最終年度であった2012年度は、日比ともに事業に参加する人の数が増え、活動の質も向上していることが実感できた1年でした。また、そうした取り組みがメディアで取り上げられることも増え、支援して下さる方も増えました。

しかし、事業や組織が発展するのに伴い、新しい課題にも直面しており、それらに対応する対策が必要になっています。山積する課題を乗り越えるためにも、2013年度は、アクセスがめざす「10年後のビジョン／私たちは10年後に何を達成していきたいのか」について、日比のボランティアスタッフ・会員・職員・理事で広く、深く議論することが必要だと考えています。

組織化を通じた住民のエンパワメント

フィリピン側では、「事業地を4地域に限定し、ベレーズを重点事業地とする」、「住民の組織建設とそのためのスタッフの能力開発に優先して取り組む」など、4つの中期方針を掲げ、活動に取り組みました。

2012年度の成果は、支援活動の方向性(詳細はP30-31)を明らかにすることができたこと、特にベレーズにおいて、組織化を進展させることができたことです。保護者会・奨学生会の組織化が進み、子どもの権利擁護のための取り組みが前進しました。その他の地区でもプログラムと組織が整理され、プログラムごとの住民の組織化が少しずつ進みました。

フィリピン3ヵ年中期方針

(2010年度～2012年度)

1. 事業地を4地域に限定し、拡大しない。
2. ベレーズを重点事業地として位置づける
3. 住民の組織建設とそのためのスタッフ能力開発、管理部門の強化に優先して取り組む。
4. 理事会間の意思決定機関として運営委員会を置き、業務の意思決定機関(運営委員会)と執行機関(事務局)を区別する。

フィリピン組織体制の前進と課題

国際理事会、フィリピン理事会・運営委員会といった意思決定機関が定期的に開催されるようになったことはこの3年間の大きな成果でした。その中で、アクセスのビジョン、ミッション、ゴールを議論し、明らかにすることもできました。また、総務・経理などの間接部門も、効率的に業務ができるようになっていきます。

しかし、業務統括・指導機関である運営委員会が十分に機能しなかったこともあり、日々の業務の方向性や優先順位がぶれやすい、労務管理がうまくいかない、若手スタッフの離職が続くといった課題に直面しました。これらの課題を克服するため、2013年度は抜本的な対策をとる必要があります。

■ビジョン(展望)

私たちの夢は、次のような社会を築くことです。

- ✓ 人々が互いに多様性を受け入れ協調して生きられる社会
- ✓ 人々が自然環境と調和して暮らす社会
- ✓ 土地とすべての生産資源に誰もが平等にアクセスすることのできる社会
- ✓ 人々が社会関係を創造・発展させる自由、自分たちが責任を持って統治する自由を享受する社会
- ✓ 人権・尊厳・創造性が尊重される社会
- ✓ 人々、特に子どもたちが健康に、家族や社会の中で生きづらさを感じることなく生きられる社会
- ✓ 国境がなく、誰もが自由を大切にする社会

■ミッション(使命)

私たちは、アジア、とりわけフィリピンの貧しい人々の困窮状態に突き動かされ、また人としての義務感に鼓舞されて、国際連帯の推進、すなわち貧困・人権侵害・戦争と平和の諸問題に国境を越えて共同で取り組むことを通じて、貧しい人々・収奪された人々・抑圧された人々の集団的エンパワメントに献身します。

■ゴール(目標)

私たちは都市と農村の窮乏したコミュニティにおいて、住民のニーズに応じたプログラムを複合的に実施することを通じて、住民が民主的に運営する組織を建設し、国際的・国内的なネットワークを形成することをめざします。

アクセス・フィリピンの ビジョン・ミッション・ゴール

■戦略

私たちは、これらのビジョン・ミッション・ゴールの達成のために、貧困の中で生きる人々自身による草の根の住民組織を組織すると同時に、日本人とフィリピン人の中産層や専門家たち(学位保持者や大学卒である必要はない)に働きかけ、私たちが関わっている都市および農村の貧しいコミュニティのニーズに対応した複合的なプログラムに参加する人々のネットワークを広げます。

また、こうした取り組みが安定的に行えるよう、責任ある組織の管理・運営を実現します。

より多くの市民とともに創る国際協力

アクセスでは、一人でも多くの人々に活動に参加してもらい、「誰もが希望を持って生きられる社会」を多くの方々とともに創っていきたいと考えています。

日本では、「会員や協力者の方々の参加によって創られる活動と組織」などをビジョンとして掲げながら、3 ヵ年計画の目標達成に向けた取り組みを進めてきました。2012 年度は情報公開や成果・課題の報告をより丁寧に行いながら、さまざまな活動参加の枠組みを提案し、会員・支援者の皆さんに支援を広げていただきました。

特に、既存の会員・支援者の方が複数口数支援してくださるケース、ご家族や友人などにアクセスを紹介していただくケース、地域や学校、職場などでハガキ集めに取り組んでいただくケースがこの1年でずいぶん増えました。また、新聞やラジオなどのマスメディアを活用することで関西地域における知名度のアップが進むと同時に、書き損じハガキ収集キャンペーンや奨学金プログラムへの協力者が拡大しました。

こうした取り組みの結果、2012 年度の収入目標に対して、実際の収入は30万円ほど足りませんでしたが、予想を超える寄付金をいただくことができ、単年度赤字は免れました。2012 年度の財務強化の取り組みから得たノウハウを活かし、2013 年度は更なる会員増に向けた努力を重ねていく必要があります。

社会人も活動できる場づくりが課題

現在の課題は、「何か活動に参加したい」という想を持った社会人や主婦、シニア層などが活躍できる場がまだないことで

日本財務 3 ヵ年計画達成 のためのビジョン

(2010 年度～2012 年度)

1. 会員一人ひとりの参加によって創られる活動と組織を実現する。
2. 支援者・協力者が高い意識と満足感を持って継続的に支援・協力してくれる活動と組織を実現する。
3. 京都・関西において、国際協力 NGO としての知名度と信用を得る。
4. 安定した雇用、健全な職場環境を確保できる安定的な自己資金財源を確保する。

す。2013 年度は、カフェイベント、チャリティお食事会、チャリティバザーなど、多様な活動を創り出し、もっと多様な人々にアクセスの活動に関わってもらえるような仕組みを整備していく計画です。

日比アクセスを貫く 10 年後のビジョンを描く

2013 年度は、「アクセスは 10 年後に何を達成したいのか」という夢を日本とフィリピンとでともに描き、その夢の実現のために誰もがワクワクしながらアイデアを出し合い、実践していく……そんな組織づくりを進めたいと考えています。アクセスの活動に参加し、10 年後のビジョンに向かって行動することが、日本の協力者の皆さんにとっての楽しみや刺激、学びにもつながっていくことをめざします。

龍谷大学国際文化学部齋藤ゼミの皆さん



会員から広がる、ハガキ集めの輪

会員であると同時に、フェアトレード事業部とピナツボ支援チームの現役スタッフである馬場眞貴子さん。大学のゼミのなかまに呼びかけて書き損じハガキ集めにも取り組んでくれ、約半年で401枚ものハガキを集めていただきました！

福岡在住の会員である石本淳慎さんも、浄土真宗本願寺派北豊教区門司組としてとハガキ集めに取り組んでくださり、これまでに800枚以上のハガキやテレカなどをご寄付いただきました。いずれもフィリピンの子どもの奨学金として、使わせていただくことになりました。（P7も合わせてご覧ください。）



奨学金プログラムを受け、小学校を卒業することができた5人。現在は中学生となり、毎週土曜日に村の子どもたちに勉強を教える、補習授業の先生役を務めている。

5人の奨学生が小学校を卒業！

2013年3月、アクセスの奨学生5人が小学校を卒業しました。うち2人は6年生時には14歳で、経済的な理由で学校に通えなかった時期があった子どもたちでした。年齢のわりに体が小さく、とても6年生には見えない子もいます。奨学金がなければ小学校すら卒業が難しかったであろう子どもたちの晴れ姿を、親たちは溢れる笑顔で喜んでいました。

この奨学金プログラム、2012年度は日本のサポーターや支援者の協力により、ペレーズでは51名の子どもたちの小学校就学を支援することができました。2010年度から始まった近畿労働金庫との共同事業「心のそしな」による給食事業も、継続しました。（「心のそしな」プロジェクトの詳細については、P12をご覧ください。）

子どもにやさしいコミュニティづくり

一見、平和そうに見えるペレーズにも、いじめや虐待、非行の問題は存在しています。ここ数年は、若年層への麻薬の広がりも心配されています。そうした問題が起こりにくいコミュニティを作るために、また問題が起こっても地域の人々が協力することで早期に解決できるコミュニティを作るために、アクセスは保護者会や奨学生会を組織し、メンバーが協力して地域課題を解決していけるように支援しています。

2012年度は、支援者の皆さまからのご寄付や、今井記念海外協力基金からの助成金によって、「子どもに優しいコミュニティづくり」を目的としたセミナーを年間通して20回近く開催することができました。2011年度はセミナーを通じた働きかけによって事業を実施している村で「子どもの保護に関する村評議会」が設立されました。2012年度は、「子どもの保護に関する村評議会」がうまく機能しているマニラ首都圏内のコミュニティへの視

察旅行も実施し、評議会メンバーに、自分たちにできること・やるべきことがたくさんあることに気付いてもらうことができました。また、年度後半には住民152名が署名を提出して村議会に働きかけ、村として「子どもに優しいコミュニティ宣言」を出すことが決議されました。

子どもたちを取り巻くさまざまな問題の解決のためには、「子どもの保護に関する村評議会」への住民の主体的な参加が必要です。アクセスは2013年度も保護者会や奨学生会への働きかけを継続し、主体的に「子どもに優しいコミュニティづくり」に取り組む住民を増やしていきます。

一部事業を終了

有機養豚・菜園プログラムは、参加世帯数を10世帯から28世帯に増やすことができました。しかし、当初想定していた有機餌による飼育を定着させるのが予想以上に難しいこと、またプログラムの維持管理費に対して得られる成果が小さいことを考慮し、2013年5月で事業を終了することになりました。



小学校を卒業した奨学生は青年会メンバーとなり、土曜日の補習授業で後輩奨学生に勉強を教えます。

2012年度の実施事業と対象者数

フェアトレードプログラム	6名
奨学金プログラム	51名
青年会プログラム	20名
有機養豚・菜園プログラム	28名
マイクロファイナンスプログラム	65名

フェアトレードについてはP16を、マイクロファイナンスについてはP6をご覧ください。

ケソン州
アラバット島
ペレーズ

住民の手でつくる、多目的保健センター 「最も活躍したヘルスワーカー」受賞も



左から3人目が、表彰を受けたアクセス職員

劣悪な住環境・労働環境の中、下痢や喘息、結核といった病気や怪我が絶えないスモーキーマウンテン。アクセスでは、地域内に多目的保健センターを建設し、保健衛生プログラムを実施してきました。2012年度は地域住民10名をヘルスワーカーとして育成し、住民の傷病に対し初期治療を行うとともに、予防に重点を置いた保健衛生の啓発活動を行いました。ヘルスワーカーは、毎日ローテーションを組んで多目的保健センターの管理運営と初期治療に当たり、1年間で延べ2,150名の初期治療を行いました。また、日本のNGOである「結核予防会」と連携した結核治療においては、ヘルスワーカーのリーダー的存在であるアクセス職員（スモーキーマウンテン住民でもある）が、「最も活躍したヘルスワーカー」として、結核予防会から表彰を受けました。ヘルスワーカーたちは、地域住民の健康相談にのるようになったことで、地域の人々から信頼され、尊敬される存在となりつつあります。

ギャングの脅しの中でも活動を継続

地域住民による立ち退き反対運動が高まろうとしていた2012年7月、地域住民のリーダーだったマルーさんが、多目的保健センター近くでギャングによって殺害される事件が発生しました（詳細はP6をご覧ください）。マルーさんは立ち退き反対運動のリーダーであり、アクセスもその運動を全面的にサポートしていたため、現地のアクセス職員もギャングから脅しを受けるようになりました。私たちはマルーさん一家とアクセス職員を地域外に避難させ、まずは安全の確保に努めました。

事件後数ヶ月は住民のあいだで恐怖が広がり、公衆の場で立ち退き問題について口にする住民はいなくなりました。多目的保健センター利用者は激減し、ヘルスワーカーでさえアクセスと距離を置くよう家族から助言され、活動を休みがちになりました。

そんな中でも、数人のヘルスワーカーは住民のために保健衛生サービスの提供を継続しました。アクセス職員はヘルスワーカー数人を地域外に呼び出して研修やミーティングを続け、地域内での活動の維持のためにできる限りのことを行いました。

活動の建て直しに向けて

女性が集まって自由に悩みを話し合ったり、助け合えるような組織をつくる女性プログラムは、以前は50人以上のメンバーがいましたが、殺害事件後はメンバーが5人以下に減り、活動が停滞してしまいました。ギャング支配が強まるコミュニティの中で、集まって話をする自体が敬遠されました。

若者の健全育成のための青年会プログラムでも、事件後に活動が一度、縮小しました。しかし秋以降、Branchforth FoundationというNGOと提携してサッカーを通じた青年育成の取り組みを始めることができ、地域のサッカー好きの若者たちを集めたサッカーチームを立ち上げました。リーダーのジョマール（17歳）を中心に、メンバーたちは「スモーキーマウンテン出身のなかまで最高のチームを作る」という夢に向かって頑張っています。（下写真：サッカーチームのメンバー）



スモーキーマウンテンは、マニラ市にあるゴミ集積所の周りにできた都市スラムです。ここで暮らす人々、特にゴミの中からリサイクルできるものを拾い集め、換金して生計を立てている人々の支援活動を行っています。



2012年度の実施事業と対象者数

保健衛生プログラム	ヘルスワーカー	10名
保健衛生プログラム	手当した患者	2,150名
青年会プログラム		約30名
女性プログラム		約50名



子どもたちは給食の時間が大好き。給食を始めてから、出席率がぐんと上がりました。

2012 年度の実施事業と対象者数

ディケアセンター(幼稚園)生徒	30 名
小学生生徒	61 名
カラバオ(水牛)供給プログラム	3 家族

ピナツボ事業概要

1991 年のピナツボ火山噴火の二次災害の土石流によって村の大半が 10 メートル以上埋まってしまったバンバンガ州ポーラック町ミトラにおいて、アクセスは地域復興支援の活動を行っています。被災地の村に戻って生活を再興しようとする地元被災家族と、ピサヤ地方などから出稼ぎ労働者として移民して来た家族が共存するこの地域。異なる文化や背景をもった人々が協力し、新しいコミュニティ作りが進んでいます。

地域の子どもたち全員が 学べるコミュニティをめざして

ピナツボ火山の噴火以降、16 年ものあいだ教育施設がなかったこの地域で、アクセスは 2007 年から教育支援に力を入れて取り組んでいます。アクセスの長年の支援者である山田征さんと咲き織順子さんが多くの方に呼びかけてくださったことで、2008 年に最初の校舎建設が実現しました。以降、日本の支援者の皆さまと、現地の住民、自治体、フィリピン教育省などが連携し、地域の教育環境はずいぶん改善しています。2012 年度は、皆さまからの寄付金や会費により、91 名の子どもたちに教育のチャンスを提供することができました。(詳細については、P5 をご覧ください。)

こうした既存の活動に加えて、2012 年度は「子どもにやさしいコミュニティづくり」などをテーマにした保護者セミナーを 2 回開催したり、「どうやって貧困を克服するか」をテーマにしたエッセイコンテストも開催するなど、保護者が子どもたちのためにできることを考え、議論する場を設けました。

1 月には教育省の呼びかけで、校庭に花壇を作って野菜を植える取り組みが始まりました。地域内のブロック製造工場からはコンクリートブロック、地元の有力者からは現金、町当局からは砂とセメント、地元農家や保護者からは肥料となる水牛の糞が寄せられ、先生、保護者、子どもたちが力を合わせて花壇を完成させました。ここで育てた野菜は、今後、給食の食材として使われる予定です。

考え、話し合い、行動する場をつくる

アクセスでは、教育機会の提供とあわせて、保護者の組織化にも力を入れています。これまで、給食の調理やクリスマス会の企画などを保護者会に任せるなどして、保護者間の協力を促してきました。2012 年度は、給食の調理当番について保護者の間で話し合いを重ね、調理への参加率が上がりました。また、休みなく調理当番を務めた保護者 12 名への表彰も行われました。

水牛が生活改善への第一歩

貧しい家庭に水牛を貸し付け、農作業の効率を上げることで、収入向上に役立ててもらおうという水牛供給プログラムでは、3 家庭に水牛を貸し付けました。2013 年度も、学校に通っていない 18 歳以下の子どもがいる家庭を優先的に選び、小学校への復学や、卒業資格取得試験の受験を促すなどのサポートを続けます。

ピックアップ!

預金を通じて、子どもたちの学びを応援!

アクセスでは近畿ろうきんと連携して、ピナツボ地区とバレーズ地区の子どもたちに教育と給食を提供する「心のそな」プロジェクトを 2010 年春にスタートしました。これは、近畿ろうきんに定期預金などをしてくださった方への粗品をなくし、粗品分の費用を子どもたちへの支援にあてるというものです。

預金をするだけで子どもたちの学びを応援できるというこのプロジェクトに、たくさんの方が賛同してくださっています。この取り組みは、企業とNPOの協働事業を表彰する「パートナーシップ大賞」の 2011 年度グランプリにも選ばれ、新聞・ラジオ・雑誌等でも紹介されました。

「国際支援に関心はあるけど、何からはじめたらいいかわからない」という方、預金からはじめてみませんか?

■問い合わせ 近畿ろうきん 本店営業部 TEL 06-6449-1211



水牛の世話をする少年ジェンジェンさんと母親



火災発生直後のアペロクルス。コンクリート作りだったため、一部焼け残った家。



アクセスから受け取ったベニヤ板と釘の支援で再建された家の前で。

450 世帯が被災する大火災に緊急救援

2012 年 7 月 11 日、アペロクルスの一画でまた、大規模火災が発生しました。アクセスがアペロクルスでの活動を始めた 1997 年以来、地域で大規模火災が起きるのは 4 回目になります。幸い死者はでなかったものの、約 450 世帯が被災、奨学金プログラムで支援をしている 3 人の奨学生も被災しました。そこで急遽、アクセス会員・支援者のみなさまに支援をお願いし、当初目標としていた約 60,000 円分をはるかに超える、122,500 円もの寄付金をいただきました。

被災した約 450 世帯すべてに支援を提供することは難しかったため、現地住民によって構成される住民組織「アペロクルス住民協議会」のメンバーと協議した上で、地域の中でもより貧しい被災家庭を対象として支援を行うことになりました。対象となった世帯は、被災前から貧しい生活を強いられていた家庭、片親家庭、慢性病を患っている家族がいる家庭などです。

<アクセス・アペロクルス住民協議会による支援>

1. 被災直後の緊急支援

アペロクルス住民協議会メンバーが古着を集めて 40 世帯に分配
食料品パック(お米とビーフン)を 30 世帯に配布
被災した奨学生 3 名に制服を提供

2. 住居再建支援

より貧しい家庭 20 世帯にベニヤ板、釘、トタン板など、住居再建に必要な資材を必要に応じて提供

なお、頂いた支援金のうち使用しなかった残金 47,550 円は、今後また起こりうる台風や火災などの災害に備え「災害用基金」として保管することになりました。

アペロクルス概要

アペロクルスは、マニラ首都圏パサイ市にある典型的な都市スラムです。川沿いに簡素な家々が密集して立ち並び、約 7500 人の人々がひしめきあうようにして暮らしています。

奨学生プログラム、9 名が小学校を卒業

アペロクルスでの奨学金プログラムでは、26 人(うち 2 名はハイスクール)の奨学生に学用品や制服を支給し、9 名が小学校を卒業することができました。アペロクルス住民協議会スタッフは奨学生の保護者との隔月の定例会議を開催し、クリスマス会などの行事や日本の支援者への報告について話し合いました。また、奨学生が病気になった際の医療費支援も行いました。

コンピュータの授業が大人気！

奨学生は 9 月以降、青年会メンバーが月 2 回行った補習授業に参加しました。以前は 30 人ほどのメンバーがいた青年会ですが、2012 年度頭から主要メンバーが就職するなどの理由で活動できなくなり、活動が停滞しています。しかし、残ったメンバー 2 人の奮闘により、補習授業の出席率が大きく改善しました。前年度までの補習授業は、学校で学ぶ主要 5 科目(国語、算数、理科、社会、英語)だけでした。2012 年度は、青年会メンバーの得意分野であるコンピューターの使い方とダンスを教える授業を補習の中に組み込んだところ、出席率がほぼ 100%となり、毎回行うミニテストでもほとんどの子どもが合格点をとる結果となりました。ここ数年はフィリピンの小学校でもコンピューターの授業が導入されるようになっており、子どもたちもコンピュータに興味津津です。補習授業で学んだ基礎があるため、学校の授業で積極的に発言できるようになり、子どもたちの自信につながっています。

2012 年度の実施事業と対象者数

奨学金プログラム	26 名
青年会プログラム	2 名
火災被災者への支援	93 世帯

アペロクルス

日本事業報告 1

日本事務局では、2009 年度に策定した「2010-2012 年度 財務 3 カ年計画」の 3 年目として、以下の取り組みを行いました。

会員の皆さまとともに、目標達成！

2012 年度も、会員や支援者の皆さんとともにフィリピンの人々への支援を広げたいと、冬季カンパキャンペーンや、書き損じハガキ収集への協力をお願いしました。結果、目標 30 万円に対して、307,000 円の寄付(スモーキーマウンテン保健衛生プログラム支援として 66,000 円、使途指定なし 241,000 円)が集まりました。書き損じハガキ収集キャンペーンについては、会員の方々の職場や学校 9 ヶ所に収集ボックスを設置いただいたり、周囲の方々に呼びかけて集まった分をお送りいただくなど、多くの方にご協力いただきました。あわせて、「フロンティアエイジ」というシニア向け情報誌に掲載された呼びかけ記事をご覧になった方々からもハガキが寄せられ、2012 年度の目標 1 万枚を上回る 10,238 枚のハガキが集まりました。

こうした皆さまからのご支援ご協力がどのような活動に生かされ、どんな成果を生んでいるのかについては、年 4 回のニューズレター「となりのアジア」や、年次報告書、メールマガジン(年 5 回)を通じてお伝えしました。12 月には、フィリピンの受益者やスタッフから会員・支援者の皆さんへのクリスマスカードの送付も行いました。

フィリピンの子どもと直接つながれる 奨学金プログラムを重点事業に

2012 年度は、子どもたちに基礎教育のチャンスを提供する奨学金プログラムを重点事業と位置づけ、新たに 100 人の奨学金サポーターを募るという目標を設定して、さまざまな形で呼びかけを行いました。

奨学金プログラムは、支援者(サポーター)からの 15,000 円で、一人の子どもが 1 年間学校に通うことができる、という仕組みです。フィリピンの子どもと直接手紙や写真で交流ができ、顔の見える支援、成長や成果を感じられる支援として、長年続けてきました。

2012 年度前半は、奨学金プログラムの魅力を伝える新しいリーフレットを 3000 部制作したり、アクセス公式サイトに奨学金サポーター募集キャンペーンページを設置するなどして、広報体制を整備しました。その上で、年度後半は女性社会奉仕団体や企業などに協力をお願いしたり、新聞やラジオで奨学金プログラムの紹介をしていただくなど、奨学金プログラムを広く

知っていただくためのさまざまな努力を重ねました。3 月には、国際協力に関心を持つ人々と直接出会い、奨学金プログラムに関心を持ってもらうことを目的に、京都市伏見区のカフェでイベントを 2 回開催しました。このイベントには約 50 名の参加がありました。

こうした取り組みの結果、奨学金サポーターの数は 36 人増の 115 人となりました。目標だった 100 人増には遠くおよびませんが、こうした取り組みを 2013 年度も継続していくことで、アクセスの存在を広く知っていただき、少しずつ共感・協力して下さる方を増やしていこうと考えています。

地球市民教育事業の拡大

スタディツアーは貧困問題・戦争問題について感じ、知り、考えてもらうという意味で最良の地球市民教育の場です。同時に、多くのスタディツアー参加者がツアー後、支援チーム・事業部・支部の活動に参加しており、アクセスの活動を支えています。

2012 年度は、5 日間の短期スタディツアーの開催をやめ、スタディツアー12 日間で 3 回、前年度に好評だったフェアトレードツアーを 1 回、開催しました。いずれも定員いっぱいまで参加申込みがあり、合計 64 名の方にフィリピンの現状を体感していただくことができました。このうち、4 割にあたる 28 名の方が、現在もスタッフとしてアクセスの日々の活動に携わってくださっています。

【2012 年度ツアー参加者数 64 名】

スタディツアー	2012 年 8 月 16 人
	2012 年 9 月 16 人
	2013 年 2 月 16 人
フェアトレードツアー	2013 年 3 月 16 人



スタディツアーで訪れた、ピナツポ地区の学校にて

フィリピンの現状や貧困の原因、アクセスの活動を知っていたための講義・講演・パネルディスカッション等への参加については、28件と、前年度より8件増えました。講演等をきっかけに活動に参加してくださったり、寄付してくださる方が緩やかに増えています。

日本国内におけるエンパワメントという観点から、ボランティアスタッフへの研修にも力を入れています。貧困、フィリピンの歴史、戦争、グローバリゼーション、エンパワメントといったテーマで実施し、35名の参加がありました。

企業連携

2010年度に始まった近畿労働金庫(近畿ろうきん)との共同事業「心のそしな」プロジェクトは、近畿ろうきんの預金者の方に渡す粗品費用を、物品に使うのではなく、代わりにピナツボ地区とペレーズ地区の子どもたちの教育費と給食費として使うというものです。本プロジェクトによる教員増員がきっかけとなってピナツボ地区の教育環境が大きく改善するなど、「心のそしな」プロジェクトは、さまざまな良い変化を生み出しています。(詳細はP5/P12をご覧ください。)

2012年8月に始めたスモーキーマウンテンの立ち退きに反対する署名キャンペーンにおいては、NTT労働組合やフジ住宅株式会社の方々に、多数の署名をお寄せいただきました。

その他にも多数の企業の方々にご協力いただきました。物資のご寄付、ウェブ制作支援、募金箱設置、書き損じハガキ収

集ボックスの設置等でご協力くださった企業の一覧をP32に掲載しています。

財務3カ年計画の成果と課題

以上のような「財務3カ年計画」3年目の取り組みの結果、2012年度は対前年比で、約22万円の収入増、対予算比では約30万円の収入減となりました。フェアトレード事業が伸び悩んだこと、当初予定していた大学での授業受託が実現しなかったこと、会員を増やす取り組みで想定したような成果があげられなかったことなどが理由です。しかし、想定よりも多くの方からご寄付による協力を得ることができ、黒字決算となりました。あらためて、本当にたくさんの方々とともにアクセスの活動を創っているのだということを実感しています。

2013年度は、アクセス・フィリピンとともに、「アクセスの10年後のビジョン」を描く議論をすすめ、それを踏まえた次の3カ年計画(2014~2016年度)を1年かけて策定します。

	2011 年年度	2012 年度
会員数	484 人	555 人
会費額	2,877,000 円	3,952,444 円
寄付額	6,052,355 円	5,186,134 円

※上記数値は各年度末(3月)の数値です。

※2011年度の寄付額には、2つの賞を受賞した際の懸賞金が含まれています。

アクセス・日本の「財務3カ年計画」

財務3カ年計画では、2012年度末までに達成すべきアクセスのビジョンとして、以下の4点を掲げていました。

- ✓ 「理事会・事務局」だけでなく、会員一人ひとりの生き生きとした参加によって創られる活動と組織を実現する。
- ✓ 支援者・協力者が高い意識と満足感を持って継続的に支援・協力してくれる活動と組織を実現する。
- ✓ 京都・関西という地域の中で社会的認知度を高め、国際協力NGOとしての知名度と信用を得る。
- ✓ 職員の雇用を安定させ、健全な職場環境を整えることのできる安定的な自己資金財源を持つ組織を実現する。

そして、ビジョンを達成するための重点方針として、以下の2点を掲げました。

- 1) 既存会員・支援者、とりわけ支援チームOB/OGへの呼びかけを強め、活動に積極的に参加してもらえる機会を提供すること
- 2) 京都・関西の地域で、地域に根付き地域と共生する組織となること



(上)伏見区の喫茶うずらで行ったカフェイベントの様子。定員を超すお申込みがあり、フィリピンや国際協力に関心を持つ方々にアクセスを知っていただくよいきっかけとなりました。

(左)毎日新聞「あなたの愛の手を」欄に何度か掲載されていたことで、約10名から奨学金プログラムについてのお問合せをいただきました。



カードのデザイン案について話し合うフェアトレード事業部スタッフ

ココナツ殻製品の魅力を信じて

フェアトレード事業部が扱う主要な商品は、ペレーズ地区の生産者団体「マパヤパ」が作るココナツ殻製の雑貨やアクセサリです。2012 年度は約 39 万円分の商品を仕入れ、約 80 万円を売り上げることができました(2011 年度売上額は約 27 万円)。このことにより、6 名の現地生産者は合計 21 万円の収入を手に入れました。2013 年1月からは、新規採用したパートタイム職員とフェアトレード事業部のボランティアスタッフが協力し、活動の幅が大きく広がりました。

ココナツ殻製品の魅力を信じて

丈夫で耐久性のあるココナツ殻製品は、消耗品と異なり大量に販売するのが容易ではありません。しかし、素材の美しさと品質の高さには自信があります。商品の魅力や生産者の生活背景をしっかりと理解してもらえるようにと、カメラマンをめざす学生にカタログ用写真の撮影を依頼し、本格的なカタログの作成に

取り組みました。2013 年度よりこのカタログを活用し、本格的な営業活動をスタートします。

また、直接お客さまの声が聞ける、フリーマーケット

やイベントでの出店販売も例年通り行いました。2012 年度は年間通して 12 回のイベントに出店し、商品の背景や魅力を多くの方に伝えました。



カタログ用に撮影していただいた商品写真

グリーティングカード生産をペレーズで

2013 年頭からは、ペレーズ地区で新たな生産者を組織し、手作りグリーティングカードを生産・販売する新事業もスタートしました。お客さまのニーズを把握するため、約 70 人の方々にカードデザインについてのアンケートにご協力いただき、アンケート結果に基づくデザイン案をフィリピン側に提案しました。これらのカードは、2013 年秋ごろから販売予定です。

フェアトレードにできること

1. ダイレクトに現金収入につながる

貧困に苦しむ人は働かなくても仕事がない、がんばって働いても低収入…ということが大きな悩み。フェアトレードで仕事の機会を増やしたり、公正な価格を支払うことで、その悩みを緩和できます。

2. 生産者の自立につながる

フェアトレードでは単純に商品を売買って買い支えるだけでなく、生産技術向上や組織の運営能力向上のための支援も行います。能力向上によって、将来的には NGO などに頼らずとも継続的に生産・取引できるようになります。

3. 生産者の自信・自尊心につながる

フェアトレードはお金や物を無償で与える支援ではありません。生産者は自分で働いて稼ぐ喜びや自信を得ることができます。またフェアトレードは

ビジネスとして成立することを目指しているので、「支援される側」と「支援する側」ではなく、ビジネスパートナーとして対等な関係を築くことができます。

4. 貧しい地域の人々に夢を与える

いきいき働く生産者の姿を見て、まわりの大人や子どもたちが「自分も頑張れば何かできるかも」、「貧困から抜け出せるかも」と夢をもつきっかけになる可能性があります。

5. 貧困問題に関心を持ってもらうきっかけになる

普段、国際協力や貧困問題に関して関心が低い人にも、「かわいい!」「おいしそう!」という視点からフェアトレード商品を手に取ってもらえる可能性があります。フェアトレード商品を広めることで、普段何気なく購入している商品の背景に貧しい人々がいるかもしれないと気づいてもらうことができます。

【フェアトレード事業部とは】①貧困地区における雇用の創出と現金収入の確保、②生産者団体へのエンパワメント、③貧困問題を日本の市民に伝え、解決手段としてフェアトレードを推進する、という 3 点を目的として活動を行っています。具体的には、ペレーズ地区でフェアトレード生産者団体の組織化、商品開発支援、商品仕入れと管理、フリーマーケット等での販売、取引先の拡大、日本でのフェアトレードの普及などを行っています。



日本事業報告3

開発教育チーム
GET / Global Education Team

立命館大学での「模擬スタディツアー」写真展の一角の様子

リアルな言葉と、写真で伝えるフィリピン

開発教育チーム(GET)は、貧困問題の解決に向けて行動を起こす人を増やすために、さまざまな形で「伝える」活動を2002年から続けてきたチームです。スタディツアーなどでフィリピンを訪問した学生が中心となり、自分の目で見て肌で感じたフィリピンのこと、自分が出会ったフィリピンの人々のことをリアルな言葉や写真で伝え続けてきました。2012年度はメンバーの多くが就職活動に励む大学4年生だったため、ごく一部のメンバーしか定期的に活動できないという制約の中で、龍谷大学や立命館中学校・高等学校での訪問授業を実現。また、アクセス内の他の支援チームや事業部と協働して5つのイベントを成功させました。

フィリピンに行けない人にも、スタディツアー体験を

「スタディツアー中に現地を感じ、学んだことを、一人でも多くの人にも知って欲しい」。GETには、そんな強い想いを抱いたメンバーが集まっています。これまでにGETスタッフの多くがスタディツアーの引率スタッフ(リーダー)を努めてきたことも、そうした想いが反映されてのことです。そんなメンバーが数年前から実施しているのが、立命館大学の学園祭での、「模擬スタディツアー」です。貧困問題に関心があっても、スタディツアーに参加するのはちょっと…という方を対象に、スタディツアーの雰囲気をつくりだすべく、体験要素も盛り込んだ写真展です。

スモーキーマウンテンのゴミ捨て場を再現したエリアがあったり、ココナツ採集が疑似体験できるスペースがあったり…と工夫が凝らされていて、例年多くの来場者があります。GETは、アクセスの事業地それぞれを支援するほかのチームに呼びかけ、全チームが協力して1つの「模擬スタディツアー」という企画を成功させるためのコーディネーター役として、2012年度も力を発揮しました。

伝えることから、行動することへ

2013年度末、大半のメンバーが大学を卒業と同時にスタッフとしての活動を終えることになりました。同時に、春のスタディツアー参加者や、GET/FACTが合同で行ったカフェイベントの参加者など6人がスタッフに加わり、新体制での活動がスタートしました。2013年度は、「伝えることで、貧困をなくそうと実際に行動する人を増やす」ことが目標です。



2013年度のGETを担うメンバーたち

500 以上の文書を翻訳、 日本とフィリピンを橋渡し



アクセス事務所の会議室で翻訳作業にとりくむ FACT メンバー

3 割の子どもたちが小学校すら卒業できないフィリピン。アクセスでは、都市スラムであるアペロクルス地区と、農漁村地区ペレーズで、一人でも多くの子どもたちが小学校を卒業できるように、奨学金プログラムを続けています。2012 年度は、77 人の子どもたちの就学を支援しました。

奨学金プログラムでは、日本の支援者と奨学生が手紙などのやりとりをすることで交流を深めます。この時、手紙などの翻訳を担っているのが、FACT(ペレーズ・アペロクルス支援チーム)です。2012 年度は、500 以上の手紙や報告書の翻訳を行い、日本の支援者の方々と子どもたち、保護者たちの間の橋渡しをしました。

3 月には、開発教育チーム(GET)・事務局とともにカフェイ

ントを 2 回開催し、合計約 50 名の方にご参加いただいて、奨学金プログラムのサポーターとなっていただくよう呼び掛けました。年度内のサポーター増には直接はつながりませんでしたが、活動を広く知っていただく貴重な機会となりました。

フィリピンの子どもたちと 日本の中学生をつなぐ

日本の中学校の生徒とフィリピンの子どもたちとの橋渡しをすることも、FACT の活動の1つです。京都市立修学院中学校と豊中市立第八中学校の皆さんには、長年、ペレーズ・アペロクルスの子どもたちへの支援を続けて頂いています。FACT メンバーは年に数回、それぞれの学校を訪問し、全校集会や生徒会メンバーのための研修会などに出席して、フィリピンの現状を伝えたり、子どもたちとの手紙やビデオによる交流を仲介しました。2013 年度はスカイプ(動画付インターネット電話)を使ったペレーズの子どもたちとの交流を検討しています。リアルタイムでフィリピンの子どもたちと交流することで、心の距離を縮めてもらえれば、と願っています。

2012 年度は、ペレーズ支援チーム(FACE)とアペロクルス支援チーム(ACT)が合併し、「FACT チーム」として活動した最初の年でした。メンバーが増えて活気が生まれたことはもちろん、2 つのチームの経験を生かし合ったこともあり、非常に充実した 1 年となりました。2 年目は、「フィリピンの子どもたちと日本の支援者の交流」という重要な役割を果たしながら、業務の効率化を進める計画です。



フィリピンから届いた、手作りメッセージカードを手にした FACT メンバー。カードや報告書から伝わってくる子どもたちの成長や、それらを受け取った支援者の方々からの喜びの声が、FACT メンバーの活動のモチベーションになっています。



(上)「立ち退き問題」をテーマにしたお盆イベントでの集合写真、

目標 1 万人の署名集めを達成！

FITは、スモークーマウンテン地区に暮らす人々の生活を向上させることを目的に、アクセス・フィリピンが実施している保健衛生プログラム、青年会プログラム、女性プログラムを日本からサポートする活動を行っています。2012 年度は、スモークーマウンテン住民の想いに寄り添い、立ち退き反対キャンペーンに全力で取り組みました。（立ち退き問題の詳細については、P6をご覧ください。）

年度前半は、フィリピンから届く資料や報告書などを整理し、スモークーマウンテンの現状や、立ち退き問題のポイントをわかりやすい資料にまとめる作業に力を入れました。7 月以降は、署名キャンペーンを呼びかけるチラシや、立ち退き反対キャンペーン特設ウェブサイト、ウェブ署名ページなどを完成させ、スタディツアーに参加したなかまや家族、友人、知人などに幅広く署名への協力を呼びかけました。

8 月に東京支部の呼びかけで京都で開催されたお盆イベントでは、テーマを「立ち退き問題」とし、32 人の現役スタッフ、元スタッフ、会員の皆さんに参加していただきました。FIT からは、スモークーマウンテンの現状を伝えるプレゼンテーションを行い、殺害されたマルーさんを悼むショートムービーも上映。アクセスのネットワークを最大限活かし、「1 万人の署名を集め、スモークーマウンテンの住民の願いを応援する！」という決意表明の場となりました。この日、スモークーマウンテン住民を励ます動画メッセージの撮影も行い、後日、フィリピンに届けました。

8 月のイベントに参加いただけなかった会員・支援者の皆さまにも、郵送で立ち退き反対署名キャンペーンとカンパへの協力をお願いし、最終的に 11,083 人の方々からのご署名、276,637 円のカンパをいただきました。署名はフィリピン政府に

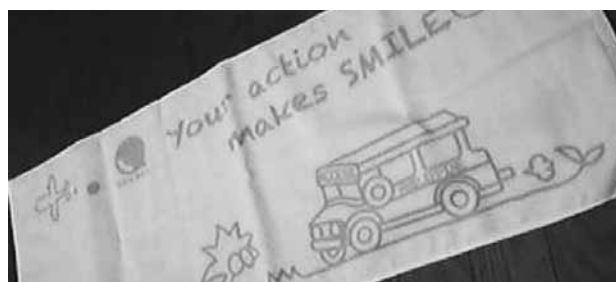
届け、カンパは立ち退き反対運動にかかる活動費（書類作成費、交通費、人件費等、必要な経費）にあてさせていただきました。

並行して FIT メンバー数名がフィリピンを訪問し、スモークーマウンテン地区住民との交流や現状把握を行ったほか、再定住地候補地を訪れて、郊外の再定住地の生活環境や、移住している人々の思いのヒアリングを行いました。

2013 年 7 月現在、「地域に残って、地域を発展させたい」という住民の願いが実現できるかどうかの見通しはまだ立っていません。難しい状況が続いていますが、FIT は住民の方たちの選択、決断を尊重し、サポートを続けます。

新しいチャリティ・グッズも

スモークーマウンテンで行っている保健衛生プログラムや女性・青年プログラムを支えるため、以前から FIT はチャリティグッズを開発、販売しています。これまでに、ポストカード、T シャツを制作しており、2012 年度は新商品としてアクセスのロゴ入りタオル（下写真）を制作し、販売しました。2013 年度も引き続き販売を行っていきます。



(下) 第一次集約で集まった署名用紙



一人でも続けた、ロラを支える活動

ロラ支援チームは、第二次世界大戦中に旧日本軍兵士によって性暴力を受けたフィリピン人女性たちのグループ「マラヤ・ロラズ」を支援するチームです。被害を受けた女性たち(ロラ／フィリピン語で「おばあちゃん」という意味)とともに、ロラたちの正義を実現すると同時に、戦争のない、女性の権利が守られたよりよい社会を創っていくことを目的として活動をおこなっています。

2012 年 3 月、チーム創設メンバーが卒業したため、現役スタッフは 1 名となってしまいました。心細い状況ではありましたが、残ったメンバー 1 名のロラたちへの思いは強く、事務局と協力して活動を続けました。

力不足を実感

ロラたちへの医療支援プログラム

4 月、ニュースレター「となりのアジア」の発送時に、ロラに会ったことのあるアクセス会員の皆さまに案内をお送りし(マラヤ・ロラズに関する冊子、および医療支援プログラムへのご寄付のお願い)、ロラたちのための寄付を募り始めました。集まった寄付金は合計 5000 円と、LOLA チームの予想を大きく下回るもので、医療ケアを必要とするロラたちのニーズに十分応えられるものではありませんでした。とはいえ、集まった 5000 円は、夏のスタディツアーの際にマラヤ・ロラズの代表に直接手渡し、病気を患うロラたちのために役立ててもらうことになりました。

医療支援プログラムは、LOLA チームの立ち上げメンバーが現地を訪れた際に知ったロラたちの要望を踏まえ、2011 年度にメンバー 3 人がじっくりと準備してきた企画でした。しかし、2012 年度に入ってメンバーが一人になり、呼びかけの方法なども十分に議論できなかったことが、背景にありました。

ついに活動休止へ

2012 年夏、最後の一人だった LOLA チームメンバーが海外留学に出発することになり、LOLA チームは活動を休止せざるを得ない状況となりました。

しかしその後、2012 年夏のスタディツアー参加者の中から、戦争や戦時性暴力問題に強い関心を持つメンバーが集まり、秋ごろから新メンバーでの活動が始まりました。

活動再開以降は、メーリングリストを通じての情報共有や、月



2012 年度後半から活動を始めた新メンバーのミーティングの様子



マバニケ村では戦時中、村中の男性が小学校に集められ、虐殺されました。その後、女性たちが「赤い家」と呼ばれる場所に連れて行かれ、集団レイプを受けたのです。写真はその小学校に作られた記念碑です。

1 回のミーティングでの情報交換、戦時性暴力問題についての自主学习など、地道な活動を行いました。また、2013 年春のスタディツアーでは、ロラたちに交流の手紙を届けました。

活動の方向性を見つめなおす

新メンバーとなって半年、2013 年春のスタディツアー参加者もメンバーに加わり、LOLA チームは 6 人の体制で活動を続けています。ロラたちの思いを受け、自分たちがどんな活動をしていくべきなのか。活動を一から問い直す話し合いを続けています。



チャリティイベント「フィリピンなう」の協力者の皆さんとともに

校舎建設で、地域の夢を後押し！

2010年に発足したPEACE(ピナツボ支援チーム)は、2011年7月よりメンバー不足のため活動休止となっていました。2012年春のスタディツアー参加者が中心となって、「ピナツボ地区に教育施設を建設しよう！」という目標を掲げ、活動を再開しました。

アクセスはピナツボ火山の被災地であるミラ地区で、教育支援に力を入れてきました。アクセスが2008年に4教室の校舎を建てたのを機に公立小学校がスタートし、今では幼稚園2学年、小学校5学年まで、地域で学べるようになりました。4教室しかないため、複式学級や時間差通学で7学年に授業を行っています。

PEACEは、幼稚園・職業訓練施設として使える建物を1棟建設することで、「小学校卒業までみんなが学べるコミュニティづくり」に貢献しようと、100万円を目標に協力者を募っています。

知って、食べて、楽しんで チャリティイベント「フィリピンなう」

100万円という大きな目標に向かってスタートしたPEACEは、さまざまな形で教育施設の必要性を呼びかけました。京都市内で街頭募金を4回実施したほか、現状を伝える写真展の開催、イベント会場での募金箱の設置なども行いました。

特に力を入れたのは、楽しみながら子どもたちの支援ができる、チャリティイベント「フィリピンなう」です。京都市内にあるバザールカフェを会場に、カフェのスタッフの方々や、京都フィリ

ピン人コミュニティ・バグアサ、在日フィリピン人留学生会 KAPS、フェアトレード団体等にご協力いただき、フィリピンの料理や音楽などを楽しみながら、フィリピンの現状を知っていただくイベントを開催しました。PEACEとしては初のイベント企画運営でしたが、多くの方に支えられ、43,444円の収益を建設費にあてることができました。

この他にも、自転車で京都市内を回りながら、出会った人々に募金をお願いする「チャリ旅チャリティー」も行いました。

これらの活動を通じて、1年間で368,078円を集めることができました。

目標100万円の達成に向けて

2013年春のスタディツアー以降、多くのツアーの参加者がPEACEの活動に参加してくれ、現在は14名で活動しています。今後は、新メンバーの得意分野を活かし、チャリティフットサル大会などを実施し、目標100万円の達成をめざします。



京都の四条河原町での街頭募金



大忘年会に集まった 62 人のアクセスのなかまたち

離れていても、忙しくても、 アクセスのなかまと集えるように

東京支部がここ数年力をいれて企画・実施しているお盆イベントとアクセス大忘年会は、アクセスの活動を支えるボランティアスタッフと会員の皆さんの交流の場として、毎年多くの方に参加いただいています。

8 月に京都市内で開催したお盆イベントは、「スモークーマウンテンの立ち退き問題」をテーマにし、32 名の会員・スタッフにご参加いただきました。スモークーマウンテン支援チーム(FIT)による立ち退き問題に関するプレゼンテーションの時間を設けたり、現地の住民を励ますショートムービーを撮影するなど、参加者の想いを1つにして立ち退き反対署名キャンペーンに取り組んでいこうとする集まりとなりました。

また、12 月 30 日に京都市内で開催したアクセス大忘年会では、会員・スタッフ総勢 62 名が参加。2012 年に活躍したスタッフやチームの表彰、オリジナル・チャリティ商品の販売、ミニ・チャリティ・コンサート、フィリピンからのビデオメッセージなどを企画しました。今年は特別企画として、「私とアクセス」という取り組みも実施しました。参加した方に、「あなたがアクセスとかかわり続けている理由は？」と問いかけ、その答えを書いた紙を手に、写真を撮る、という企画です。その際の写真が、本年次報告書の表紙となっています。

お盆イベント、大忘年会は、参加費の一部をアクセスへの寄付とするチャリティ・パーティー形式をとり、合計約 8 万円をアクセス事務局およびスモークーマウンテン支援チーム(FIT)に寄付することができました。

アクセスの Facebook ページを開設！

2012 年度は、イベント出展やスタディツアー広報などの既存の活動に加えて、ソーシャルネットワーキングサービスの1つであ

る Facebook 上にアクセスの公式ページを開設するための企画を進めました。アクセスの広報は広報委員会と事務局が担っていますが、インターネットを活用した広報は十分にできていません。そこで、東京支部が中心となって Facebook ページの作成と、運営体制づくりを進めることにしました。

こうして開設したアクセスの Facebook ページでは、アクセス・フィリピンの日本人スタッフのブログなどと連動しており、「いいね！」ボタンをクリックすると、アクセスからの様々な情報が見れるようになります。Facebook を利用されている方は、ぜひチェックしてみてください。

★Facebook 上で「NGO アクセス」で検索

<https://www.facebook.com/accessPhilippinesJapan>



アクセスの Facebook ページのトップ画面

慶応大学の国際協力団体と連携

このほか、慶応大学内の学生国際協力団体「ジョリビー」のメンバーに対し、模擬訪問授業を行って貧困の現状などを伝えるノウハウをシェアしたり、フェアトレード勉強会を共同で開催するなどの取り組みも進めました。

2013年度、 ご参加、ご協力いただきたい活動

アクセスでは、フィリピンの5つの事業地でさまざまな支援事業を行い、日本でも多くのイベント・企画を行っています。その中でも、2013年度に特に力を入れて取り組む活動、特に多くの方にご協力いただきたい部分を、ポイントを絞ってご紹介します。

ぜひ、ご協力ください。また、これ以外にもご協力いただけることがございましたら、アクセス事務局までぜひご提案ください。



使わなくなったCD、
DVD、本、ゲームが、
世界を変える
きっかけになる

BOOK・OFF × アクセス

本、CD、DVD、ゲームを集めてブックオフに送ってください！（集荷無料）

ブックオフ（中古品買取販売業者）が買い取り、その買取額+ブックオフによる上乗せ金 10%がアクセスに寄付されます。ご不用品の処分もできてお部屋もすっきり！ぜひ周りの方にもこの活動を広めてください！詳細については、ココロ便チラシまたはアクセスのホームページをご覧ください。

★書き損じはがきや、未使用の切手・金券・テレホンカードも
引き続き、ご寄付を募っています。こちらもぜひ、ご協力ください。

65人のサポーターを募集！

週1回のコーヒー代1年分（年間15000円）で、
子ども一人が1年間、学校で勉強できる



日本の支援者（サポーター）からの年間15,000円の支援で、フィリピンの子ども1人が小学校に1年間通うことができる、という仕組みです。サポーターの方には支援する子どものプロフィールやメッセージカード、写真などが届き、子どもたちの成長を実感することができます。

2013年はサポーターのみなさまのおかげで115人の子どもたちが就学できていますが、アクセスの重点事業地であるペレーズには、経済的な理由で学校に通えない子どもたちがまだまだ沢山います。2014年6月の新学期に、さらに多くの子どもたちが小学校に通えるように、新たに65人の奨学金サポーターを募集します！

15000円の代わりに書き損じはがき400枚でも一人の子どもの就学を支援できます。ぜひ学校や職場のみなさんで協力ください！詳しい仕組みや申込方法については、お問い合わせください。資料をお送りいたします。

カフェで国際協力を語る、 カフェイベント

リラックスできるカフェで国際協力や生き方について、考え、語りあう「カフェイベント」。3月のイベントが好評でしたので今年も8月以降、内容や会場を変えて年間4回ほど実施予定です。

「国際協力してみたいけど何から始めていいかわからない」、「普段の仕事だけじゃ物

足りない」、「新たな刺激的な出会いが欲しい」、そんな人におすすめのイベントです。アクセスのことをまだ知らない人にもぜひご参加いただきたいので、ご友人・お知り合いの方を誘ってぜひお越しください！イベントについてはホームページ、Facebook、ニューズレターで告知いたします。

25周年記念イベント

ご期待ください！

今年はアクセスの創設から25周年です。ただいま記念イベントを企画中！詳しくは10月頃に発表します。皆さま、ぜひ楽しみにしていてください。

2013 年度 計 画

フィリピン

2013 年度事業の概要

2013 年度フィリピンでは、4つの事業地での活動を継続し、プログラム参加者の増加、組織化の強化、活動の質の向上をすすめます。また、1994 年～1995 年にアクセスが教育支援事業を行っていたゴミ捨て場周辺スラムのパヤタス地区で、教育支援活動を再開します。あわせて、日本とともに「アクセスの 10 年後のビジョン」を描く議論をすすめ、それを踏まえた次の 3 ヶ年計画(2014～2016 年度)を 1 年かけて策定します。

事業地ごとの取り組み課題と目標

2013 年度のフィリピン事業は、2012 年度の事業の中で現れた課題の解決を図りつつ、下記のようにこれまでの事業を継続するとともに、いくつかの新規事業を始めます。

1. ペレーズ地区

奨学金プログラムでは、事業実施村を 2 つから 3 つに拡大。奨学生会や保護者に働きかけ、「子どもの保護に関する村評議会」の活性化を通じた、子どもに優しいコミュニティの実現をめざします。

フェアトレードプログラムでは、グリーティングカード生産事業を開始し、新たに 5 人の生産者を育成します。

マイクロファイナンスも事業実施村を 2 つから 3 つに拡大、メンバーの経営能力向上を目的としたセミナーも実施します。

2. スモーキーマウンテン地区

保健衛生プログラムのヘルスワーカーを中心に、地域の女性たちの自主的な活動を促進します。

2012 年度に組織されたサッカーチームを核として、スポーツ活動を通じた青年の組織化を進めます。

強制立ち退き問題については、地域内で活動する教会や NGO などのネットワークグループ「CUPS」との連携を強化し、立ち退き問題における住民の権利擁護の取り組みを進めます。立ち退き反対運動の住民リーダーだったマルーさんの殺害事件について、犯人逮捕や裁判が迅速かつ公正に行われるよう、関係各所に働きかけます。

3. ピナツボ地区

小学校・幼稚園の PTA を「女性と子どもの権利の推進機関」として位置づけ、住民の主体的な取り組みを後押しします。今年度から開校学年が 5 年生まで拡大するのに伴い、教室不足の問題が発生しています。この問題の解決に向けて PTA が行政に働きかけられるようサポートします。また、幼稚園および職業訓練施設の建設をめざし、PEACE チームと連携して準備を進めます。

4. アベロクルス地区

奨学金事業を継続します。

5. パヤタス地区

ゴミ捨て場周辺スラムであるパヤタス地区で、1994 年にアクセスが建設した幼稚園の運営を再開します。

6. 管理部門

次の諸項目を重点課題と位置づけ、取り組みます。

- 1) 運営委員会(指導部)の再編
- 2) 10 年後のビジョンと、それを達成するための事業計画・スタッフ育成計画の作成
- 3) 次世代の指導者候補の育成
- 4) 給与体系の見直しを含めた労働環境の改善

ペレーズ地区	12 年度実績	13 年度予定
奨学金・給食プログラム	51 人	99 人
フェアトレードプログラム	6 人	11 人
青年会プログラム	20 人	20 人
養豚・家庭菜園プログラム	28 世帯	
マイクロファイナンス(小額融資)プログラム	65 人	150 人

スモーキーマウンテン地区		12 年度実績	13 年度予定
保健衛生 プログラム	初期治療／結核治療	2,150 人	2,400 人
	ヘルスワーカー育成	11 人	10 人
青年会プログラム		30 人	30 人
女性プログラム		50 人	20 人
強制立ち退き問題への取り組み		約 6,500 人	約 6,500 人

ピナツボ地区		12 年度実績	13 年度予定
教育・給食プログラム	小学校	61 人	80 人
	デイケアセンター	30 人	30 人
カラバオ供給プログラム		3 家族	3 家族

アベロクルス地区	12 年度実績	13 年度予定
奨学金プログラム	26 人	16 人
青年会プログラム	2 人	

パヤタス地区	12 年度実績	13 年度予定
デイケアセンターの運営		30 人

日本

2013年度事業の概要

2013 年度はフィリピンとともに、「アクセスの 10 年後のビジョン」を描く議論をすすめ、それを踏まえた次の 3 カ年計画(2014～2016 年度)を 1 年かけて策定します。フィリピンのスタッフの給与アップと円安が重なり、事業費・管理費の増大が避けられない難しい 1 年になることが予想されますが、長期的なビジョンを掲げることで、会員・スタッフ・職員・理事などが団結して前向きに課題に取り組める環境づくりを進めます。

また、より多くの人にアクセスを知ってもらい、ともに活動を創ってもらえるよう、スタディツアー以外のルートでの認知度向上に取り組む、入会、ボランティア参加、寄付などにつなげます。

1. 会員・支援者とのコミュニケーション

ニュースレター、年次報告書、メールマガジン、Facebook などを通じて、会員・支援者の皆さまに、フィリピンの現状や貧困の原因、アクセスの取り組み、皆さまのご支援がどのような成果に結びついたのか・・・といったことをお伝えします。また、地域や職場でできる国際協力の方法なども提案していきます。

2. 参加しやすい仕組みづくり

アクセスの存在を広く知っていただくための幅広い広報とあわせて、アクセスの活動に協力・参加してくださる方を増やすために、参加・協力しやすい仕組みづくりを進めます。具体的には、以下のような取り組みを進めます。

- 1) 関西地域でのカフェイベント／しゃべり場の継続開催
- 2) 25 周年記念事業を通じたアクセスの魅力発信
- 3) 書き損じハガキ収集キャンペーンの継続(目標 1 万枚)
- 4) 中古 CD・DVD・本・ゲームを集めてフィリピンを支援する「ココロ便」(中古品買取販売業者ブックオフとの連携事業)スタート
- 5) 奨学金サポーターの継続募集
- 6) 登録しやすいメールマガジンシステムの導入
- 7) 会員制度の簡素化
- 8) クレジットカード決済システムの導入
- 9) マンスリーサポーター制度の導入

カフェイベントや 25 周年記念事業などを通じてフィリピンや国際協力に関心を持つ人々にアクセスのことを知っていただきながら、活動への参加方法③～⑤を提示します。また、登録しやすいメールマガジンや Facebook を通じた継続的な情報発信を行うことで、アクセスに関心を持ってくださった方々に繰り返し参加を呼びかけます。

寄付や会費の支払いをインターネット上でクレジットカード決済できる仕組みも導入し、便利に負担なく支援していただける

体制に変えていきます。

3. 理事会・事務局によるチーム活動への支援

ボランティアスタッフによって行われているチームの活動は、当会のミッションである「エンパワメント」と「地球市民形成」の実践の場です。しかし 2010 年度以降、財務計画の遂行のために事務局がオーバーワークとなり、チーム活動へのサポートが不十分になったことで、活動が停滞するチームが出ています。2013 年度は、理事会・事務局によるチーム支援により力をいれます。

4. 地球市民教育の更なる強化

フィリピンの貧困の現状、貧困や戦争の原因、そしてそれらの問題をアクセスがどのように解決しようとしているのか。そういったことを発信し、共感してくれる人を増やしていくのが「地球市民教育」です。2013 年度は、講義・講演の場でボランティアや寄付を繰り返し呼びかけ、活動参加につなげます。また、より多くの講演依頼をいただけるよう、講演会パッケージの作成とウェブ上での宣伝に取り組みます。

2012 年度も、国際経済労働研究所発行「Int'lecowk」誌への寄稿を継続します。

5. その他

以上のような取り組みを支える基盤を強化し、持続可能な組織を実現するために、以下のような取り組みを進めます。

- 1) 助成金の申請
- 2) 他団体とのネットワーキング
- 3) NPO 法人サービスグラントおよびパナソニックが提供する、「プロボノプログラム」を活用し、3 カ年計画を策定
- 4) 認定 NPO 法人格取得のための準備
- 5) アクセス・フィリピンへの運営サポート

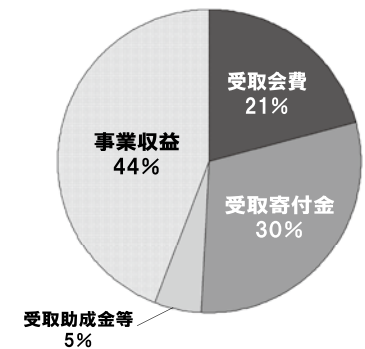
2012年度決算報告

活動計算書 自2012年4月1日至2013年3月31日

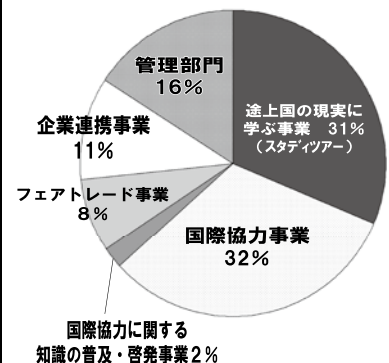
(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費	705,000	
賛助会員受取会費	792,000	
講読会員受取会費	21,000	
プロジェクト会員受取会費	2,074,444	3,592,444
2. 受取寄付金		
一般受取寄付金	2,918,400	
事業受取寄付金	2,267,734	5,186,134
3. 受取助成金等		
受取民間助成金	888,662	888,662
4. 事業収益		
途上国の現実に学ぶ事業	5,488,200	
国際協力に関する知識の普及・啓発事業	596,438	
フェアトレード事業	800,774	
国際協力事業	515,345	
企業連携事業	204,000	7,604,757
5. その他収益		
受取利息	1,624	
雑収益	0	1,624
経常収益計		17,273,621
II 経常費用		
1. 事業費		
(1)人件費		
給料手当	2,900,177	
法定福利費	0	
人件費計	2,900,177	
(2)その他経費		
海外事業費	8,628,145	
売上原価	435,811	
印刷製本費	45,575	
旅費交通費	541,884	
通信運搬費	341,458	
地代家賃	537,672	
水道光熱費	85,282	
出展費用	32,862	
研修費	1,500	
賃借料	5,529	
保険料	1,080	
減価償却費	24,060	
消耗品費	168,028	
諸謝金	48,312	
支払手数料	8,095	
支払寄付金	12,018	
その他経費計	10,917,311	
事業費計		13,817,488
2. 管理費		
(1)人件費		
給料手当	977,423	
法定福利費	504,945	
人件費計	1,482,368	
(2)その他経費		
外注費	42,000	
印刷製本費	195,516	
旅費交通費	78,512	
通信運搬費	126,442	
地代家賃	184,328	
会議費	1,700	
水道光熱費	102,360	
研修費	2,300	
賃借料	2,031	
新聞図書費	5,040	
消耗品費	50,253	
諸会費	65,000	
租税公課	70,700	
支払手数料	173,385	
雑費	740	
その他経費計	1,100,307	
管理費計		2,582,675
経常費用計		16,400,163
当期正味財産増減額		873,458
前期繰越正味財産額		8,371,076
次期繰越正味財産額		9,244,534

収入内訳



支出内訳



貸借対照表 2013 年 3 月 31 日現在

(単位:円)

科 目	金 額	科 目	金 額
I 資産の部		II 負債の部	
1 流動資産		1 流動負債	
現金預金	9,157,740	買掛金	34,866
売掛金	0	未払い金	0
棚卸資産	783,252	前受金	715,000
商品	742,527	短期借入金	0
切手等	40,725	預り金	123,772
前払金	0	仮受金	25,000
短期貸付金	0	未払い法人税等	70,000
流動資産合計	9,940,992	流動負債合計	968,638
2 固定資産		2 固定負債	
(1)有形固定資産		長期借入金	0
什器備品	72,180	固定負債合計	0
	72,180	負 債 合 計	968,638
(2)投資その他の資産		III 正味財産の部	
保証金	200,000	前期繰越正味財産	8,371,076
	200,000	当期正味財産増加額	873,458
固定資産合計	272,180	正味財産合計	9,244,534
資 産 合 計	10,213,172	負債及び正味財産合計	10,213,172

財務諸表の注記

- 重要な会計方針
財務諸表の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)によっています。
(1) 固定資産の減価償却の方法
有形固定資産は、定額法で償却をしています。
(2) 棚卸資産の評価基準および評価方法
棚卸資産の評価基準は原価基準により、評価方法は先入先出法によっています。

- 事業別損益の状況
事業別損益の状況は以下の通りです。

(単位:円)

科 目	途上国の現実に 学ぶ事業 ※	国際協力に 関する知識の普及・ 啓発事業	フェアトレード事業	国際協力事業	企業連携事業	事業部門計	管理部門	合計
I 経常収益								
1. 受取会費		128,000	129,000	1,613,444		1,870,444	1,722,000	3,592,444
2. 受取寄付金		184,170	1,029	1,235,975	846,560	2,267,734	2,918,400	5,186,134
3. 受取助成金等				888,662		888,662		888,662
4. 事業収益	5,488,200	596,438	800,774	515,345	204,000	7,604,757		7,604,757
5. その他収益			542	244	255	1,041	583	1,624
経常収益計	5,488,200	908,608	931,345	4,253,670	1,050,815	12,632,638	4,640,983	17,273,621
II 経常費用								
(1) 人件費								
給料手当	1,156,032	191,337	436,066	895,576	221,166	2,900,177	977,423	3,877,600
法定福利費				0	0	0	504,945	504,945
人件費計	1,156,032	191,337	436,066	895,576	221,166	2,900,177	1,482,368	4,382,545
(2) その他経費								
海外事業費	3,050,000	0	150,000	3,932,145	1,496,000	8,628,145	0	8,628,145
売上原価	0	47,999	387,812	0	0	435,811	0	435,811
外注費	0	0	0	0	0	0	42,000	42,000
印刷製本費	35,695	0	0	9,850	30	45,575	195,516	241,091
旅費交通費	417,724	27,370	57,354	32,017	7,419	541,884	78,512	620,396
通信運搬費	124,020	20,496	47,892	125,359	23,691	341,458	126,442	467,900
地代家賃	218,016	36,083	72,975	168,890	41,708	537,672	184,328	722,000
会議費	0	0	0	0	0	0	1,700	1,700
水道光熱費	37,065	6,134	6,285	28,708	7,090	85,282	102,360	187,642
出展費用	2,000	0	30,862	0	0	32,862	0	32,862
研修費	1,500	0	0	0	0	1,500	2,300	3,800
賃借料	2,408	397	407	1,858	459	5,529	2,031	7,560
新聞図書費	0	0	0	0	0	0	5,040	5,040
減価償却費	0	0	24,060	0	0	24,060	0	24,060
消耗品費	79,894	9,837	18,972	47,954	11,371	168,028	50,253	218,281
保険料	1,080	0	0	0	0	1,080	0	1,080
諸会費	0	0	0	0	0	0	65,000	65,000
諸謝金	0	15,000	33,312	0	0	48,312	0	48,312
租税公課	0	0	0	0	0	0	70,700	70,700
支払手数料	2,485	0	1,445	4,165	0	8,095	173,385	181,480
支払寄付金	0	12,018	0	0	0	12,018	0	12,018
雑費	0	0	0	0	0	0	740	740
その他経費計	3,971,887	175,334	831,376	4,350,946	1,587,768	10,917,311	1,100,307	12,017,618
経常費用計	5,127,919	366,671	1,267,442	5,246,522	1,808,934	13,817,488	2,582,675	16,400,163
当期経常増減額	360,281	541,937	△ 336,097	△ 992,852	△ 758,119	△ 1,184,850	2,058,308	873,458

※「途上国の現実に学ぶ事業」・・・スタディツアー事業

- 使途等が制約された助成金等の内訳
使途等が制約された助成金等の内訳は以下の通りです。

(単位:円)

内 容	期首残高	当期増加額	当期減少額		期末残高	備 考
心のそしな事業	718,000	846,560	1,496,000		68,560	2013年度分前受
今井記念海外協力基金助成金	0	870,000	870,000		0	
JICA基金	0	515,345	515,345		0	
京都地域創造基金	△ 1,662	1,662	0		0	
合 計	716,338	2,233,567	2,881,345		68,560	

2012年度決算報告

財産目録

2012年3月31日現在

[単位:円]

科 目・摘 要		金 額	
I 資産の部			
1 流動資産			
現金預金		(9,157,740)	
現金	ピナツボ支援チーム (PEACE)	3,000	
	スモークマウンテン地区支援チーム (FIT)	46,498	
	ペレーズ/アベロクス支援チーム (FACT)	0	
	開発教育支援チーム (GET)	24,282	
	フェアトレード事業部 (FT事業部)	89,827	
	事務局	70,285	
普通預金	三菱東京UFJ銀行 京都中央支店	2,499,139	
	ゆうちょ銀行	84,604	
	三菱東京UFJ銀行 京都中央支店 (FACE)	1,099,655	
	三菱東京UFJ銀行 京都支店 (FIT)	356,529	
	郵便振替	121,802	
	三菱東京UFJ銀行 出町支店 (FT事業部)	261	
	関西アーバン銀行 藤森支店 (FT事業部)	2,935,825	
	近畿労働金庫 伏見支店	1,826,033	
売掛金		(0)	
		0	
棚卸資産		(783,252)	
	商品	742,527	
	貯蔵品(切手等)	40,725	
前払金		(0)	
		0	
短期貸付金	アクセスフィリピン	(0)	
		0	
流動資産合計			9,940,992
2 固定資産			
有形固定資産		(72,180)	
什器備品	パソコン1台	72,180	
投資その他の資産		(200,000)	
保証金		200,000	
固定資産合計			272,180
資産合計			10,213,172
II 負債の部			
1 流動負債			
買掛金		(34,866)	
	アクセスフィリピン	34,866	
未払金		(0)	
		0	
前受金		(715,000)	
	ペレーズ奨学金2013年度分	215,000	
	支援者(奨学金プログラム)	500,000	
短期借入金		(0)	
		0	
預り金		(123,772)	
	所得税、社会保険等	123,772	
仮受金		(25,000)	
	支援者	25,000	
未払法人税等		(70,000)	
		70,000	
流動負債合計			968,638
2 固定負債			
長期借入金		0	
固定負債合計			0
負債合計			968,638
正味財産			9,244,534

監査報告書

監 査 報 告 書

特定非営利活動法人アクセス
 ー共生社会をめざす地球市民の会
 理事長 新開 純也 殿

平成25年 6 月 8 日

監 事 渡邊 功

私は、平成24年度(平成24年4月1日から平成25年3月31日まで)
 における特定非営利活動法人アクセスー共生社会をめざす地球市民の会の
 業務及び財産の状況を監査の結果、いずれも不正の行為又は法令若しくは定
 款に違反する重大な事実は認められませんでした。

以 上

私たちの活動の柱

活動の柱1

エンパワメントという考え方

私たちは、貧困問題を解決する主体は、貧困の中で生きる住民自身であると考えています。その上で、住民自身が自らを組織し、協力して自分たちの抱える問題を解決する力を身につけること(エンパワメント)を支援することが、NGOの主要な役割であると考えているのです。

具体的には、教育支援、保健衛生支援、生計支援、青年育成などのプログラムを通じて生活改善をすすめながら、プログラム参加者の組織づくりを行い、活動の一部または全部を住民自身の手で運営できるようになることをめざしています。また、各地域の貧しい人々が抱える問題(都市スラムであれば強制立ち退きの問題、農村であれば大土地所有制の問題など)にも取り組むことのできる、地域全体をカバーする住民自身によって構成された住民協議会の建設もめざしています。一人ひとりの人間が持つ力は小さくても、得意分野を活かし、支えあい、学びあい、協力する場となる組織があれば、貧困に立ち向かうための大きな力を生みだせる。そう信じて、組織づくりを通じたエンパワメントを大切にしています。

私たちが創ろうとする住民組織とは

私たちが最貧層の人々と共に創り出そうとしている、貧しい人々自身の組織(People's Organization=PO)は、次のような力を持つ組織です。

1. 民主主義を実践する力
2. 事業を運営する力
3. コミュニティ内のより貧しく、より抑圧されている人々を優先することのできる力
4. コミュニティの内外を問わず、人権・戦争(支配者による暴力的支配)という諸問題に取り組むことのできる力
5. 他のコミュニティ・他の地域・他の国の民衆の貧困・人権・戦争(支配者による暴力的支配)への取り組みに開かれ、連帯することのできる力
6. 地方や中央政府と交渉し、場合によっては闘うことのできる力

他方、「北」(先進国)の市民のエンパワメントも、NGOの重要な役割であると考えています。「南」(発展途上国)の貧困問題は、16世紀以降の植民地支配に始まる「北」による「南」の支配と搾取の結果です。この地球にある限られた資源や土地を、より多く手に入れることができる、またはより多く利用できる国や人々だけが豊かになり、それらを奪われたり自由に利用できない国や人々は貧しさを強いられます。貧困問題を解決するには、そうしたアンフェアな世界の仕組みを変えていく必要があります。

そして、そうした世界の仕組みを変えていくためには、「南」の貧しい人々の努力だけでなく、「北」の市民の自覚と参加が不可

欠です。経済的に豊かであっても、社会を変える力をまだ十分に持たない私たち「北」の市民が協力できるネットワークを創り、議論と実践の場を提供することでエンパワメントする。それまた、NGOの任務だと考えます。

アクセス日本のボランティア活動の促進に重点を置いた活動は、まさにその実践です。アクセスの目的に沿いつつも、それぞれ異なるテーマや課題を掲げたチームが組織され、独自の会議と活動を持って、自分たちで決めたことを自分たちで実行しています。現在、7つの支援チーム・事業部・支部が活動を継続しており、チームメンバーとして登録されているボランティアスタッフの数は60名を超えています。

私たちにとってボランティアスタッフとともに進める活動は、日本の市民のエンパワメントの一つの形であり、それ自身が私たちの会の目的となっています。そして、ボランティアスタッフ自身がさらに多くの人々に働きかけ、エンパワメントを進めているのです。

活動の柱2

地球市民という考え方

貧困問題に取り組むとき、『南』の問題は『南』の人々が解決するのであり、『北』の人々はそれを外部から支援するだけである」という考え方があります。しかし私たちは、たとえ「南」の地域で発生している問題であっても、「北」の市民も「地球市民」として「南」の市民と同じように問題に主体的に取り組むことができ、取り組むべきであるという考え方をしています。

1980年代以降、グローバリゼーションが急速に進展・深化し、多国籍企業化による資本の「北」から「南」への移動と移民・出稼ぎ労働者の「南」から「北」への移動が歴史的規模で進行しています。1990年代以降の日本のNGO活動の発展も、こうした文脈の中にあります。そうした中で、「南」と「北」の市民同士の、政府や企業を媒介としない直接的なつながりが、国境を越えて質・量共に発展しています。日本の社会や政府の問題は日本人の問題、と済ませてしまうことのできない状況が生まれつつあるのです。フィリピンの社会や政府の問題も同様です。

こうした社会背景のもと、アクセスはスタディーツアーをエンパワメントと地球市民形成のための重要な環としてとらえ、力を入れて取り組んできました。また、フィリピンで日本人インターンを積極的に受け入れ、支援チーム・事業部も、年に1〜2度フィリピンのプロジェクト地を訪れ、支援している住民との交流や担当スタッフとの会議を直接行ってきました。アクセスの組織自身も、形式的には日比それぞれの国家の法律に基づきそれぞれの国に法人を組織していますが、実質的には単一の国際NGOとして活動を行っています。

こうして、私たちは「南」と「北」で市民のエンパワメントを進めながら、国境や国籍を超えて同じ目的を共有する「地球市民」という意識でたくさんの人々をつなげ、市民同士の直接の協働関係を築くことを通じて、貧困問題を解決しようとしています。

エンパワメントと組織化

「エンパワメント」とは、アクセスが貧しい人々の支援をする際、もっとも重視している考え方です。エンパワメントには様々な定義がありますが、簡単に言えば、「人々の持つ潜在能力をひきだし、自ら問題を解決できるような力をつけること」と言えます。

自立支援としてのエンパワメント

貧しい人々の生活状態をよくしたいと思ったとき、支援の仕方にはさまざまな方法があります。1つは、食事を提供したり、着るものを提供したり…今まさに足りていないものを、現物で提供するという支援です。これは短時間ででき、成果もわかりやすい。けれども、こうした支援には、支援に依存し、自分の力で貧困から抜け出そうという努力をしなくなる危険性がつきまといます。

そこで多くのNGOが行っているのが、「問題を解決する手段を教える」という支援です。貧しい農民には、より収穫を得られるような農法を教える。子どもたちには、将来、安定した仕事につきやすくするために、教育の機会を提供する。働かなくても仕事が見つからない人々には、商品として売れる品物を作る技術を身につけてもらえるよう訓練する。こうして、それぞれの人が直面している課題について、その課題を解決するための力を身につけられるような支援(エンパワメント)を行うのです。アクセスのプログラムのほとんどが、これに当てはまります。しかし、アクセスはそれだけで終わりたいと考えています。

「協力する力をつける」エンパワメント

ある子どもを大学進学まで支援し、卒業後に一流企業に就職できたとしましよう。その子は家族のために立派な家を建て、携帯電話やコンピュータを買って、不自由ない生活を実現することができるようでしょう。でも、その子が他の貧しい家族については気かけないとしたら…？フィリピンでは、家族・親戚間での助け合いはとても大切にされていますが、血縁関係にない人々同

士が助け合ったり、みんなで協力して問題を解決しようとする姿勢はそれほど強くありません。むしろ、貧しさから抜け出そうと、「家族や親戚のために、他を蹴落としてでも自分はチャンスを掴まなければ」と努力する人が多いといえるかもしれません。

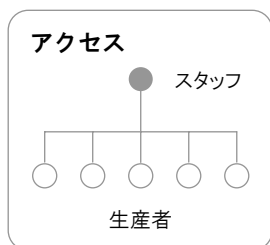
そんな社会の中で、同じ苦勞を抱える人々どうしが、力をあわせて共通の課題に立ち向かっていけるようにしていきたい、というのがアクセスの考えです。たとえば奨学金プログラムでは、子どもたちに教育の機会を提供すると同時に、保護者会を組織しています。保護者会では、子どもたちの多くがお腹をすかせたまま授業を受けているという現状をなんとかしようと、保護者が交代で給食を調理し、届けるという活動を始めました。個人では解決できない問題について、共通の課題を抱えた保護者が自らを組織し、協力し合い、問題解決のための取り組みを皆で実施し、継続できるようにしていく。アクセスは、そうした活動に必要な資金を調達し、その事業の運営・組織の運営にあたって必要なさまざまなスキルを保護者が身につけられるよう、サポートをしています。アクセスでは、こうした集団に対するエンパワメントに力を入れています。

もう1つ、アクセスがめざしているのは、貧しい人々に地域ぐるみで問題を解決しようとする力を身につけてもらおう、ということです。教育や仕事、保健衛生など、特定の分野ごとの事業運営と並行して、地域全体が抱える課題(大土地所有制や、立ち退きの問題など)に取り組める組織をつくることをめざし、活動を行っています。

フェアトレードプログラムの場合

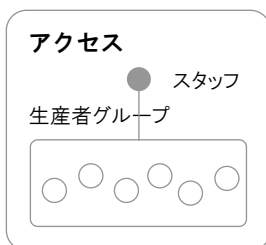
ペレーズ地区で、地域に豊富にある素材(ココナツ殻など)を活用した商品の生産・販売を行い、そこから得られる収入で生産者の生活を向上させていくという取り組みです。

2000年スタート当初



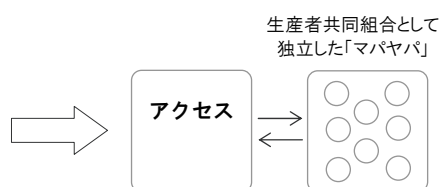
働きたいと願う女性を対象に、技術指導を行い、商品生産を開始。日比共同でデザインを開発し、主に日本で販売。一人ひとりの生産者が、アクセスのスタッフから直接、指導や注文を受けていました。

2012年度



生産者グループ「マバヤバ」を組織して、役員選出、規約づくり、定例会議の開催が実現。以前はアクセス・スタッフが行っていた発注の配分、品質管理、出荷準備などもメンバーで分担して行うようになっています。アクセス・スタッフは、生産者団体が自立できるよう、サポートを行っています。

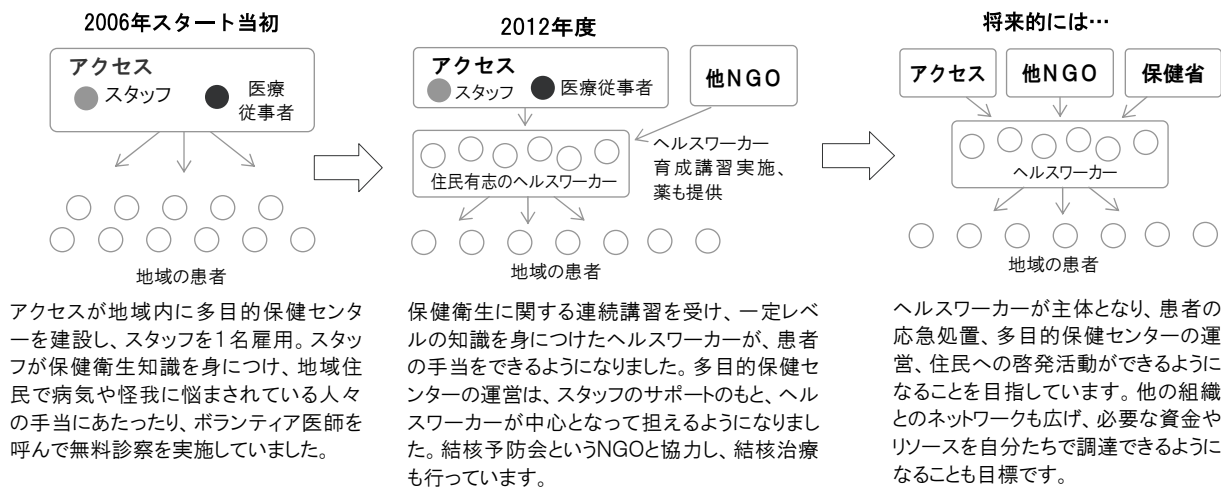
将来的には…



生産者一人ひとりが対等な立場で経営・運営にたずさわり、民主的にものごとを決定する共同組合として、マバヤバが自立することを目指しています。アクセスは、マバヤバの取引先であり、相談役として関係を継続します。

保健衛生プログラムの場合

スモーキーマウンテン地区で、病気や怪我の初期治療ができるヘルスワーカーを育成し、住民に基礎保健サービスを提供しています。病気を予防する方法や、自宅での手当の方法などを住民に伝える啓発活動も行っています。



貧しい生活の中で、十分な教育を受けることができずきた人々にとって、事業を運営したり、組織として話し合いでものごとを決めたり問題を解決したりするというのは簡単なことではありません。そんな中、アクセスでは保護者会や生産者団体、ヘルスワーカーといった、プログラム参加者によるグループを組織し、日々の活動を通じて、メンバーが事業運営に関するさまざまなスキルを身につけられるようにしているのです。

アクセス・スタッフの仕事は、そうした事業運営をまずは自らやることで手本を示し、その後、徐々にその仕事を参加者に引き継いでいくこと、そして組織運営に関するアドバイスをしたり、相談にのったりすることです。また、子どもや女性の権利についてのセミナーを行ったり、貧困が生まれる構造についての学習会を行うなどして、住民の意識の向上にも力を入れています。

コミュニティ・エンパワメント～地域の問題にとりくむ組織づくり

現在、アクセスが行っているすべてのプログラムのもとで、住民のグループを組織すること、そしてそれぞれのプログラムを組織のメンバー自身が運営できるようになることをめざしています。それが実現したら、それぞれの組織の代表者が集まって、地域の多くの人たちが共通して抱えている問題の解決にとりくむ「住民協議会」をつくっていきたいと考えています。

住民協議会の建設と役割

将来的には…

アクセス

アクセスの役割は、住民協議会が取り組む課題について、活動の参考になる情報・人脈などあらゆるリソースを提供したり、活動の相談にのったりすることです。

【ペレーズ地区住民協議会】

マパヤバ生産者共同組合

青年会

保護者会

奨学生会

マイクロファイナンス・グループ

土地問題

環境問題

女性の権利

子どもの権利

農村地区の貧困の原因の1つは、大土地所有制ですが、一部の農民が不満を口にしたら大土地所有制をなくすことはできません。でも、土地なし農民が協力し、一斉に声を挙げれば、状況を改善できる可能性はあります。

子どもの権利についても、尊重されるべき権利について知る人を増やし、多くの子どもが団結して権利を主張すれば、権利侵害は減っていきます。

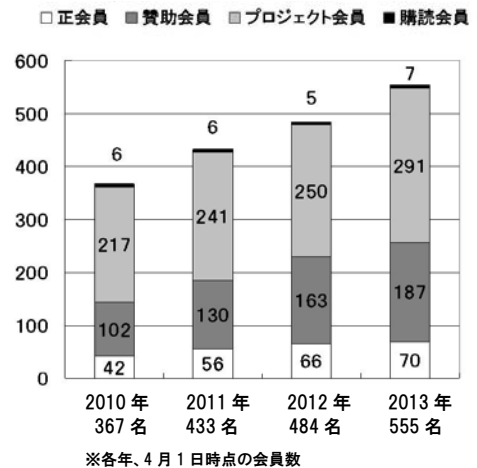
地域が抱える問題について提起し、どうすれば問題が解決できるのかを考え、議論し、行動にうつしていくための場が、住民協議会です。

会員・寄付者について

2012年4月より2013年3月末までの1年間で、71名会員が増え、全555名になりました(2013年3月末現在)。寄付については、78名の個人と、11のグループ・法人等から資金のご寄付をいただきました。

書き損じハガキの収集キャンペーンでは、2012年度中に331名の個人および15のグループ・法人等から、10,238枚の書き損じハガキのご寄付をいただきました。また、24名の個人と、5つのグループ・法人等から、文房具、衣類、未使用のテレホンカード・金券・切手などの物資のご寄付をいただきました。

アクセスの活動は、会員・支援者の皆さまお一人お一人のご理解とご協力のもとに成り立っております。2012年度にいただいたご支援・ご協力に、あらためてお礼申し上げます。



ご支援いただいた助成団体（2010年度以降）

- 特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター／財団法人 庭野平和財団「国際協力NGO次世代リーダー育成事業」(2010年～2011年)
- 独立行政法人 国際協力機構「世界の人びとのための JICA 基金」(2010年～2011年)
委託事業：フィリピン・ケソン州アラバット島ペレーズ地区の貧困層の子どもたちを対象とした奨学生プログラムの奨学生会・保護者会のエンパワメントを通じた、健康な家族生活と子どもに優しいコミュニティの建設事業
- 財団法人 庭野平和財団(2011年) 助成事業：ごみ投棄場周辺コミュニティにおける、保健衛生プログラム運営支援事業
- 財団法人 日本国際協力システム「NGO支援事業」(2012年) 助成事業：団体基盤強化事業
- 公益信託 今井記念海外協力基金「国際協力NGO助成」(2012年・2013年)
助成事業：貧困層の子どもたちを対象とした奨学生プログラムの奨学生会・保護者会のエンパワメントを通じた、健康な家族生活と子どもにやさしいコミュニティの建設事業
- 独立行政法人 国際協力機構「世界の人々のための JICA 基金」(2012年～2013年)
委託事業：フィリピンの貧しい農漁村におけるマイクロクレジット事業と女性たちのエンパワメント
- 特定非営利活動法人 アーユス仏教国際協力ネットワーク「NGO組織強化支援事業」(2013年)
- パナソニック株式会社／特定非営利活動法人 サービスグラント
Panasonic NPO サポート プロボノ プログラム／事業計画立案サービスグラント プロジェクト型助成 (2013年)

ご協力いただいた企業・学校・団体等（2012年度）

- 協働事業
近畿労働金庫(2010年～現在) ペレーズ地区・ピナツボ地区の子どもたちに教育と給食を提供する「心のそしな」プロジェクト

- ご寄付・ご寄贈・ご協力
株式会社キッズドリーム、三彩商事株式会社、うさくマ有限公司、古着屋KINJI、七田チャイルドアカデミー(桃山教室、城陽教室、伏見教室)、未来洞、奈良県農協、有限会社ウエストコースト、京都市立修学院中学校、豊中市立第八中学校、café harvest、京都市立伏見工業高校、龍谷大学経済学部大林ゼミ、龍谷大学国際文化学部斎藤ゼミ、地球愛祭奈良実行委員会、中部大学ボランティア NPO センター、かみひとネットワーク京都、CAFÉ PACE、和ん通、ビストロデマニラ、花キャベツ、井口文華堂、Vegans Café and Restaurant、浄土真宗本願寺派北豊地区門司組、フジ住宅株式会社、NTT 労働組合、バザールカフェ(順不同)

加盟団体・ネットワーク等（2012年度）

- 特定非営利活動法人 関西NGO協議会 (正会員／理事／NGO研究会メンバー)
- 京都府国際交流団体情報ネットワーク「kokoka 国際交流団体ねっと」(会員)
- 特定非営利活動法人 国際協力NGOセンター (正会員)
- 京都市市民活動総合センター(運営委員)
- 日比NGOネットワーク (正会員)

役員・スタッフ

【日本理事会】

理事長	新開 純也	元株式会社タカラブネ社長
常務理事	森脇 祐一	事務局
理事	江口 慶明	関西大学生協同組合専務理事
理事	河西 実	フェアプラス事務局長
理事	片岡 卓三	医師
理事	菊池 光造	京都大学名誉教授
理事	崎山 政毅	立命館大学教授
理事	千田 智之	株式会社ソフトバス代表取締役
理事	田中(廣瀬) 雅規	株式会社高島屋社員
理事	塚本 誠一	弁護士
理事	中本 式子	前生活クラブ京都エルコープ理事長
理事	野田(森脇) 沙良	事務局
理事	廣瀬 昌代	同志社大学大学院総合政策科学研究科
監事	渡邊 功	公認会計士

【日本運営委員会】

安里陽子、井芹絵里香、岡田隆介、河西実、加藤良子、杉山遼、新開純也、田中雅規、廣瀬昌代、野田沙良、森脇祐一

【日本事務局】

事務局長	野田 沙良
事務局員	竹内 紅仁子
事務局員	中山 麻衣子
事務局員	森脇 祐一
インターン	益田 浩

【フィリピン理事会】

理事長	カルメンシータ・カラグタグ（メンチ）
専務理事	ジョスエ・ロヨラ（チト）
理事	アイダ・カルロス
理事	石川 雅国
理事	カルメリータ・モランテ

【フィリピン運営委員会】

ジョスエ・ロヨラ(チト)、石川雅国、ロサリナ・クラマー(リサ)

【フィリピン事務局】

事務局長	ジョスエ・ロヨラ（チト）
事務局員	石川 雅国
事務局員	ロサリナ・クラマー（リサ）
事務局員	マリエル・フアット（イエン）
事務局員	レイム・ジョニー・ラクトゥアン（ジェイ）
事務局員	クリスター・ジョン・ララ（ジェリック）
マイクロファイナンス担当	アーヴィン・マキナノ
マイクロファイナンス担当	ライアン・サルバドール
インターン	奥村 祐子
インターン	オニール・バルビド
インターン	ジョセフ・スティファン・カストロ
インターン	ラッキー・レオ・アンバル
インターン	ルエル・バルソ

【フィリピン事業部】

ペレーズ地区	アルキメデス・ソリエサ（アーチ） ジョアン・リャニータ
ピナツボ地区	ロランド・カンデラリオ（ランド） アイリーン・ブラヤグ ジェネット・アルバロ
スモーキーマウンテン地区	ジェニファー・モラロス（ジェーン） ジョマール・デ・ヘスス

事業部・チーム・支部・委員会

【フェアトレード事業部(FT 事業部)】

廣瀬昌代、田中雅規、馬場眞貴子、石川樹里亜、中井美彩、谷浦智佳子、井上果央莉、橋詰佳穂、坂井美亜

【開発教育チーム(GET)】

磯尾悠真、山本彩加、吉井瞳、池辺沙奈枝、川島寛久、上田祐樹、蛭田彩、粟津涼平、白柳飛翔

【アペロクルス・ペレーズ支援チーム(FACT)】

篠原由衣、松岡春香、長岡文音、奥村祐子、此和愛佳、斉藤岳、近藤沙紀、倉崎龍、小出侑季

【スモーキーマウンテン支援チーム(FIT)】

杉山遼、氏田楓、和田美未子、富田沙樹、谷和之、野越玲奈、西田友紀、宮川駿、橋本祐希、真壁萌、猪野順子

【ロラ支援チーム(LOLA)】

吉井瞳、森継吏恵、中井美彩、氏田萌、河内山芽以、中川華奈

【ピナツボ支援チーム(PEACE)】

氏田楓、三谷真満、松岡春香、奥村祐子、東口壽男、津曲敦子、馬場眞貴子、河内山芽以、金川小夏、早田咲希、小笹誠一、山本真司、斉藤岳、南裕子

【東京支部】

佐藤真彦、呉屋真心、物延玄朗、平井理代、阿部仁美、関根美法、牧野祥子、岩田美香、伊東香穂里、藤本美咲、高橋美輝

【広報委員会】

梅田たけし、高島直美、吉田三奈美、竹内紅仁子、高橋諭吉、内海誠也、野田沙良

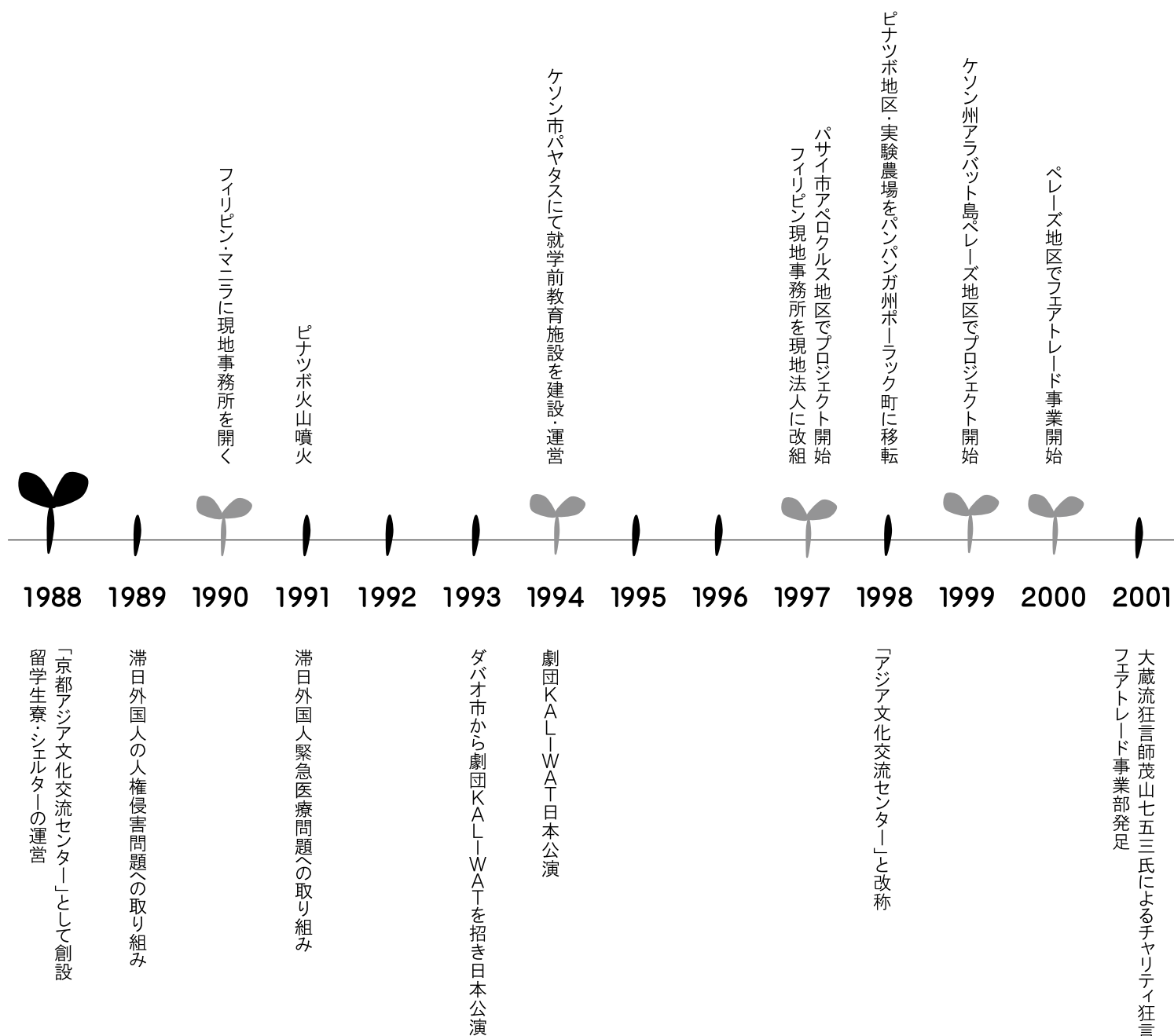
【事務局】

片岡正美、窪田静太郎、小峠忠義、西川富雄

*ピナツボ支援「僕たちは世界を変える」チームは、PEACE チームと改称しました。

アクセスのあゆみ

1988 - 2013



【わたしたちがロゴに込めた想い】

みんなで考え、話し合うことを通じて、活動を創っていく。

そんなアクセスのスタイルを表現したくて、ふきだしのようデザインにしました。

活動を通じて支えあう関係をつくりだし、その中で笑顔をつくりだしていきたい。

そんな願いを込めて、ふきだしがにっこり笑っているようなデザインにしました。

1

設立25周年／十年後の未来を描く年に
ケソン市パヤタスにて、就学前教育施設の運営を再開

ペレーズ地区でマイクロファイナンス事業開始
ピナツボ地区でカラバオ（水牛）供給プログラム開始

ペレーズ地区で奨学金プログラム、有機養豚・菜園プログラム開始
スモークーマウンテン地区で女性プログラム開始
ピナツボ地区で小学校校舎増築

ピナツボ地区で小学校校舎・井戸を建設

ピナツボ地区で就学前教育施設の運営開始

スモークーマウンテン地区で青年会設立

マニラ市トンド地区スモークーマウンテンで事業開始

アペロクルス青年会・ペレーズ青年会設立

設立25周年／十年後の未来を描く年に

ACTチームとFACEチームが合併し、FACTチームに

「パートナーシップ大賞」グランプリ受賞
（特定非営利活動法人パートナーシップ・サポートセンター）
第五回かめのり賞 受賞（公益財団法人かめのり財団）

PEACE（ピナツボ支援チーム）発足

LOLA（ロラ支援チーム）発足

FIIT（スモークーマウンテン支援チーム）発足

「アクセス・共生社会をめざす地球市民の会」と改称

ペレーズ支援チーム発足

ACT（アペロクルス支援チーム）発足

BYPS（ペレーズ家庭養豚奨学プログラム支援チーム）発足

GET（開発教育チーム）発足

9 8 8 - 2 0 1 3



access

市民のネットワークが貧困のない社会を創る

特定非営利活動法人 アクセスー共生社会をめざす地球市民の会

612-0029 京都市伏見区深草西浦町4-78 村井第一ビル2F 7号室

TEL/FAX 075-643-7232 E-MAIL acce@sannet.ne.jp

<http://www.page.sannet.ne.jp/acce/>

